

第二百二十九 足利義持壽像

絹本着色

竪三尺八寸四分 横一尺九寸五分

山城國高尾 神護寺藏

(第二百四頁參看)



同年閏五月十三日 鹿王院御成、御齋、上進物(中)君澤山水繪四幅、收獲龍虎二幅(同書)

同年六月廿一日 松首座賜龍翔寺公文、乃獻盆一枚、繪一幅、花瓶一箇、以致謝、繪乃張伯洪所圖人形也(同書)

同年四月十六日 雲居庵御成(中)常住御引物之外、水瓶一對、繪二幅、盆一枚、院主私獻之(同書)

同年十月廿七日 御引物共之被參(中)本尊一幅、御齋、御齋四幅、御齋(中)御屏風一雙、御齋(永享九年行幸記)

同年九月廿三日 福真院御成(中)管領山名、亦社御相伴(中)繪二幅、自福真院獻之(隆涼軒日錄)

同十一年四月廿五日 等持院御成、御齋、乃年始之御成也(中)柏心和尙獻以馬三疋、盆一枚、龍虎繪二幅(同書)

同十二年三月六日 當院御齋、白毫院御成、御齋、戒道院御相伴、表參、住持獻(中)繪四幅、人形繪(同書)

同年六月廿七日 等持寺(中)御齋、御齋(中)繪四幅、盆一枚(同書)

同年八月廿八日 東禪院御成、御齋(中)山水繪四幅、御齋(同書)

嘉吉元年六月廿三日 雲澤軒御成、御齋(中)繪三幅、盆二枚(同書)

長祿二年五月九日 三幅一對、本尊文殊、無準和尙自筆自贊、臨朝陽對月、收獲筆、北洞、海絕兩和尙贊被下也、即爲御禮謝獻盆一枚、唐絲一束(同書)

同年六月六日 福真院御成(中)坂西堂、玉泉主、崇侍者、奉願、御目、各獻盆、繪、水滸、小帶瓶(同書)

同年十月十九日 興善院御成、煎點(中)盆、繪二幅(同書)

寬正元年六月十六日 奉、公此日招致管領右京兆藤元公、治左司馬道賢公(中)奉出利劍、名畫、良馬爲其報也(碧山日錄)

同二年六月八日 御繪三幅、本尊聖于、無準和尙贊、月靈贊、脇花鳥、御齋、御齋、以奉阿被下、蓋以前被下御繪三幅、以御泉殿爲御繪、又獻之、故以製之尊意再

被下之、仍人成賀之(隆涼軒日錄)

同年十一月十八日 興善院內廣德軒梵檢西堂爲進物、進上物、花鳥繪四幅、毛筆、盆一枚(同書)

同三年三月十四日 繪三幅、馬、杉原十帖、於泉軒獻之(同書、雲澤軒御成之條)

同年十一月十九日 前日御判拜領、爲御禮、獻盆一枚、繪二幅、御齋(同書)

同五年三月十一日 前日十日、以平阿被下三幅御繪(中)本尊觀音像、月靈贊、脇二幅山水、旁花鳥、此三幅拜領非常之龍光也(同書)

同年三月廿八日 前日山尾張守殿、借與管領細川殿私篋、始被御成、仍今晨被獻御引物、內、橫書圖子平筆也、尤有名譽、仍伊勢守使、予拜見之、觀之、其

筆始不絕嘆也(同書)

同六年九月十日 出雲守寄子江州津津兼、經庭、田屋、新保、此三人上洛、各御繪一荷、紙十進上候、御對面、右京大夫殿先日御出、爲御禮、以武庫御申候、御太

刀、其具刀、吉光、繪四幅、君澤、盆、馬一疋、青毛、申次寺町三郎左衛門方江親元進書狀案內申畢(親元日記)

同年十二月廿日 上様御座所、還御(中)上様御成(中)進物、先若君、繪江、御齋、白(中)繪、御齋、御齋(同書)

文正元年二月廿七日 前廿五日肥前所御成、進物前日爲例、仍今晨獻之、種々珍物、諸人(中)繪三幅、繪本尊觀音、脇參拾、和尙(隆涼軒日錄)

同年五月七日 等持寺院主梅室來、話次(中略)梅室曰、某重年侍勝定相公五年、大内德雄居士、就正禪院、奉請勝定院殿、德雄以天神像獻相公、先問某曰、此像珍勝久、今日相公辱來臨、殊以獻之、重收深榮、無草贊(臥雲日伴傳)

同年八月五日 琉球國芥蔭西堂偶來、話刺移、語愚老曰、先所贈之梅月大軸者、自大唐國贈于琉球國王之畫軸也、今度此方來朝之次、乞之持來、仍與于愚云、然則千萬里之志、所之不亦幸乎(隆涼軒日錄)

文明元年二月廿五日 通上(中略)御繪三幅、本尊月夜畫收帳(中略)以上、飯尾肥前守之禮、飯尾宅御成記)

同十四年四月廿六日 通上(中略)御繪二幅、真王御筆(中略)山名治部少輔豐時(伊勢守貞忠卒御成記)

同年八月廿六日 通上(中略)御繪三幅、本尊之聖畫之筆、伊勢次郎左衛門貞仍(同書)

同十五年十月 其夜てんきう様より、勝田方御つかひにて、兵部之御宿へつかはされ候物の注文繪二幅(中略)御つかひにて被下候(伊達家文書、伊達成宗上洛日記寫)

同十六年八月廿四日 午後就黒井村代官職事、往栗井近江守宅、持以普現長者軸有實、大丁事(隆涼軒日錄)

同十八年六月十七日 自細川典康、以赤澤兵庫助、見仲昨日之禮謝、賜以直夫筆三幅一對、脇指絶贊竹書一對、一山贊(同書)

同十九年五月六日 愚先白案内、則御成御對面處(中略)願、西堂遺物、小繪二幅、芙蓉梅短(同書)

同年六月十四日 自西芳寺、以了春行者、見贈十六羅漢之像、必可供古覽(同書)

長享元年十月十日 江州蘆浦觀音寺住持了忠上人、持武夷山圖子昭筆(中略)來、有實雜話(同書)

同二年三月五日 墨梅軸一幅、同贈梅莊軒(同書)

同年同月十日 晚來春英、來、被仲一昨日禮謝、持以觀音像一幅、杉原十帖、菓子盆十枚有實(同書)

同三年九月五日 今晚禪祖圖一幅、幸甚(中略)下、藤田大和守宅(同書)

明應元年二月二日 早且遣桂子於藤田大和守宿所、仲先日來訪之禮、贈以猪頭和尙像一幅、障障筆(同書)

永正元年閏三月八日 御繪四幅、被周子昭筆(中略)給之(宜風卿記)

同六年三月十三日 繪三幅一對、月畫筆進之候(伊達家文書、大内義興書狀)

同十五年四月五日 繪三幅、觀音月夜、觀音成收國筆進之候(同書、細川高國書狀)

同年同月同日 繪三幅一對、被進候(同書、寺町通隆奉書)

天文元年十一月廿一日 土岐新居移徒、以狀賀之、藤氏墨竹、能阿銘、二幅一對、宗山遺物、所繪也、遺之(實隆公記)

永祿四年三月卅日 通上(中略)御繪二幅、收帳筆、三好筑前守義朝長臣亭白御成之記)

同十年十二月廿五日 義永居館一乘谷、新公方家(義榮)御成有(中略)御成ノ御禮トシテ、(中略)御繪一幅、拜筆筆、御盆一枚、堆紅(中略)獻上之、被應仁後

記)

同十一年五月十七日「新及方家(義榮)二條殿下ヲ御同途ニテ、義景館ニ御成リ(中略)十三款、御繪一對、皇帝筆、山水、人形、御盆一枚、堆紅、四角紋(同書)

本時代に於ける繪畫鑑賞の盛なりしさまは、左に列記せる事實に由りてこれを知り、而もその多くの支那畫なりしことを觀るべく、又當時の禪僧等が、往々元明の畫譜等を讀みて、宋元の繪畫を論評せしさま、宛も近古南宗畫を好みし文人に同じく、更に賓客を遇する所以の最も重要な一要約として、挂壁の畫幅を用ひ、兼ねてその收藏に誇りし世風を察するに足る。殊に將軍家にては多く舶來の繪畫及珍器を藏し、唐物奉行(後出相阿彌の御等參事)を置きてこれを掌らしめき。東山御物など云ふは即ちこれなり。當時畫人をして挂幅屏障に畫かしむるや、これ等の支那畫を以て粉本(畫本云々)と爲さしめしこと多かりき。宋元風の行はるゝこと誠に偶然に非ざりしなり。

永享十二年八月六日「當院御成(中略)繪畫院新圖奉懸御目(隆涼軒日錄)

寶徳四年六月七日「今朝在鹿苑寺看徽宗畫、有宜和殿御製(臥雲日件錄)

長祿三年四月廿七日「春公見招、出越後及竹石圖、共品論之(碧山日錄)

同年六月五日「昨聞紹藏主、掛其室、以匡廬圖(同書)

同年十月五日「東橋房主人某來、出賣客之所畫、倭畫也、壁山、煙於草野之間、其銳氣可觀(同書)

同年同月十一日「赴梅津長福寺中、即心院點心、積長、福方丈掛松雪畫軸(臥雲日件錄)

同年十一月十四日「問清岩相接悅、掛其壁、以梁楷之所畫人物、其所爲也、野客群聚、設場爲樂、有一人長身瘦瘠、棉冠草履、疎布短袴、而鳴小鼓、其一人大面豐偉、若鹿皮裘、而手拍板子、其一人大目長髯、被碧色衣、垂長袖、低回爲舞、老艾邊其傍、六七八人也、或嘆或嘆、或佩農器、又有小童騎水牛、過前坡、而回顧舞場者、其精妙可以愛也、清岩曰、此村田樂圖也、余曰、此樂也、耳聽目未見之也、今觀之、如身自入其場者、不覺爲之抃手也(碧山日錄)

寛正元年閏九月十二日「清岩來、出畫山水、披是觀之、知中古之畫也、清岩曰、以何知之乎、曰、按畫譜曰、上古之畫、迹簡而意淡、中古之畫、細密而精微、近代之畫、煥爛以求備、今人之畫、錯亂而无旨云々、是編碎破、畫又細細而精緻、以是知中古之筆也(同書)

同二年十月廿四日「隆涼軒御成、御齋、普廣院御燒香(中略)被裁于雲頂院塔後楓樹、於東山得之、以畫樣奉懸于御目也、自被出楓樹之畫、橫井河原者使之見之、可移裁之由、被仰出也(隆涼軒日錄)

同三年三月十二日「及其與房舍、前年架四條橋之正東、郎子、富僧、皆良木嘉材之所構、四壁圖山水之境、且掛其中、以收溪之群鳥、床褥器具、皆遠致之物也、(碧山日錄)

同四年二月廿五日「隆涼曰、自公方有間、傳聞、有鹿苑院殿大井河泛舟、與諸尊宿和漢聯句、知之否、又聞、圖遊覽之形爲屏風、在雲頂院、實否云々、屏風曾有之、然大變時失之、答以此旨、想大井河之會、或在日工集乎、見告之(臥雲日件錄)

同五年十月六日「今日以例、且不參仕、仍閑々談話之次、偶益齋翁袖中出小軸、使愚老見之、即展圖、即是東坡老人遺像也、其面目也、其標格也、宛如存、尤可敬慕(隆涼軒日錄)

同六年六月廿日「御賣物代取出之、但御繪軸并御打刀一腰也、買得之者、以代物可買之也、今出川殿并伊勢守買得之、」(同書)

文明十七年十月廿四日「御持佛堂本算、可被安阿彌陀也、被障子十枚有之、書十牛可被貼也、十牛圖可有御一買相尋可遺之命有之、」(同書)

同年同月廿五日「書十牛圖以障子獻東府、」(同書)

同年同月廿八日「十牛圖、於殿中被返之、件々堀川殿事之、」(同書)

同年十一月廿四日「自東府御折三合被遺鹿苑院、文殊、維摩、李龍眠筆、牛二幅、李道、此三幅一對為書本、取出之、送入興中、還、明朝可遺鹿野助宅、」(同書)

同年十二月廿八日「齋罷、御東府十位圖草案供台賣、則有人大小、尤然也、欄干可為一撰、畫史之以心充、可付一二云々、李龍眠筆之老師青牛圖有之、命相阿可見之、」(同書)

阿可見之、(同書)

同十八年正月十八日「奉親今日鹿苑院御成、中墨、往鹿苑院、中墨、客殿三幅一對、本算布袋、脇猿猴、收漢筆、顯山相公御寄遺于相國方丈普賢相公御代、方丈額題出之、瑞月溪住持時也、」(同書)

大額題出之、瑞月溪住持時也、(同書)

同年同月廿二日「自鹿野助方、李龍眠筆老子渡關圖三幅一對來、曾龍眠筆、本算老子觀青牛、尹喜在傍、同御者一人、以上三人、脇左文宗、惟政、其外五人、有之、以上七人、右武帝、臨公、其外四人、以上六人、都合十六人在之、」(同書)

同年三月十四日「金子西支那人なり、手其唐人所書之自像而至、張應麟作贊、畫工者王氏之人也、」(同書)

同年四月廿六日「子西支那人(事波)別意圖云、」(同書)

同年五月廿九日「話及圖畫之事、夢時而語、至、觀杏林及江山畫軸々乃鹿丘所作、」(同書)

同年七月廿一日「夜來春蘭圖來、携小畫二幅、有實、深更歸院、」(同書)

同十九年六月五日「早且、以障子自畫大智御成事、中墨、客殿、掛三幅一對、金襴表紙也、本算出山釋迦、馬遠筆、臨山水、人形有之、馬驍筆、普廣院御代、當院龍虎繪收漢筆、掛之、乘佛堂相公使見之、以此三幅為替、龍虎繪收漢筆、于今此三幅在當院也云々、」(同書)

同年八月九日「遂往寶輪寺一見、中墨、就傳其家齋會、中墨、吳道士觀音像、本算掛之、脇鶴畫、掛様左右誤乎、中墨、相傳云、士廉筆、中墨、士廉筆誤歟、細點檢之、宗石、為士廉筆、有印宗石、由之觀之、宗石筆歟、」(同書)

長享元年十一月廿七日「楊貴妃圖、身軀三枚改畫、口遺相阿宅、」(鹿苑日錄)

同二年四月五日「就山崎神事、自德阿方借三幅一對、懸所持直夫筆畫三幅借之、」(隆涼軒日錄)

同年五月一日「往永德、謀京極中書事、傍旭殿主為專使、口往禪昌、觀顯顯所畫大幅三畫、中三仙、脇竹猿、相府書庫所藏、直百貫、今以五十緡為計云々、」(鹿苑日錄)

同年同月廿一日「泉涌寺常住物十六羅漢、思恭筆跡、尤殊勝也、中墨、丹青之妙、蓋目者也、同可備、觀覽之由命之、」(實陸公記)

同年同月廿六日「去廿四日、自相阿方、東府御繪外題可書之命、傳之、有人奉之忘却、今晨自相阿方、則恐未讀之、乃書外題、遺相阿宅、觀音像、收漢筆、脇四幅猿、左收漢筆、猿、右收漢筆、猿、左收漢筆、猿、右收漢筆、猿、如此本有之、如本書進上之、」(隆涼軒日錄)

幅猿、左收漢筆、猿、右收漢筆、猿、左收漢筆、猿、右收漢筆、猿、如此本有之、如本書進上之、(隆涼軒日錄)

同年同月廿六日「去廿四日、自相阿方、東府御繪外題可書之命、傳之、有人奉之忘却、今晨自相阿方、則恐未讀之、乃書外題、遺相阿宅、觀音像、收漢筆、脇四幅猿、左收漢筆、猿、右收漢筆、猿、左收漢筆、猿、右收漢筆、猿、如此本有之、如本書進上之、」(隆涼軒日錄)

幅猿、左收漢筆、猿、右收漢筆、猿、左收漢筆、猿、右收漢筆、猿、如此本有之、如本書進上之、(隆涼軒日錄)

幅猿、左收漢筆、猿、右收漢筆、猿、左收漢筆、猿、右收漢筆、猿、如此本有之、如本書進上之、(隆涼軒日錄)

幅猿、左收漢筆、猿、右收漢筆、猿、左收漢筆、猿、右收漢筆、猿、如此本有之、如本書進上之、(隆涼軒日錄)

幅猿、左收漢筆、猿、右收漢筆、猿、左收漢筆、猿、右收漢筆、猿、如此本有之、如本書進上之、(隆涼軒日錄)

同年同月廿七日 「齋前、御繪外題又改書、十枚、贈之相阿宅、今日必可供白贖之由、返奉有之、(同書)

同年同月廿八日 「西芳寺阿羅漢像、鯉魚繪、可有御一覽、可召寄之命有之、件々、冷泉殿御白次也、(同書)

同年五月八日 「心月西堂、相阿、狩野大炊助書之、中墨、茶了、大唐御眺者之事相讓、金剛書様、五色皆相故、獅子之紋亦有之、收漢墨觀音、此胎四幅見求之、月

深官女書二幅之本見求之、收漢赤墨、白墨二幅之本見求之、時正宗和尚未了、西堂為昨日之禮謝來、皆一見此書、(中墨)正宗持以東坡墨竹一幅、(同書)この記事頗る當時支那書輸入の情態を察するに足れり)

同年六月十九日 「今晨宗廟賜食掛、掛于高山、三幅一對初掛之客殿、本尊月壹觀音、胎泉帝花鳥、(同書)

同年三月十一日 「自智揚坊、百揲圖四幅、願筆來、掛之一見、則當日恰好也、可借之云々、又三幅一對、和尚之觀音、胎月壹筆人形掛之、則劣於百揲之故

返之、(同書)

延徳二年五月十三日 「自智揚坊、借鳥山殿三幅一對、畫以贈之、披之看、則收漢和尚觀音、胎人形墨圖也、月胡筆、掛松泉客殿、則豎橫皆宜、當日可掛之也、(同書)

同年同月十八日 「午後相阿持、鉄切像來、尾公權筆、掛之見、則太長大也、奉返之、(中墨)今午、相阿屏風貼畫之贊之事、辨之、問其人數、(中墨)十二員、愚所取多

雲山也、色紙一枚、相副贈取之、(同書)

同年九月廿四日 「午時、栗屋左衛門大夫方、持橫畫一幅來云、吾兄所持之畫也、拜筆筆之、子昂贊其上、七賢度圖也、其乎、屏乎、辨之可也、愚熟視之、書與贊

別繪也、不審不審、繪事相阿可辨之云々、(同書)

同三年六月十四日 「君澤四幅畫、自常善軒借之、爲書本、此書自讚州來、云、北房一見云、曾爲御物、爲書本、自公府移出之、而熟之書云々、一見則漢墨實、可

觀物也、(同書)

明應元年十月十九日 「玉泉繪、仁康四年人形二幅借之、代三百疋贖之者也、(實隆公記)

同七年四月廿六日 「半身布袋、收漢墨、武家系代重寶、號百貫布袋、各三幅一對之本尊也、土藏筆乃者、可沽却之由申之、内々申入之處、號召置

之、代物二千二百疋、立清煤給之間、再往問合了、(同書)

永正六年閏八月廿日 「予所持之妙音天像、八景押書等、傳取覽了、(同書)

享祿元年口月廿六日 「見昭房來、勸一歪、藤氏墨竹二幅、(同書)

永祿四年三月三十日 「四間御成の御座敷に成て、是にて式三獻、御などかまへあり、一間半の押板、二幅一對山水、馬騎筆、(中墨)九間の御座敷、西向

なり、二間の押板、繪三幅一對、中は王義之、胎は王輝筆云々、(三)好筑前守義長朝臣亭え御成之記。

支那の形式

支那繪畫玩賞の流行に伴ひて、畫贊の形式も一變せり、抑々繪畫の題贊は、古來佛教畫及倭繪の屏風、障子等、皆圖中に色紙形を畫きて、これ

に書くを常とせしが、前時代の頃より亦支那風に倣ひて、圖上の空位に直ちにこれを書くこと始まり、本時代に入りては、道釋、人物肖像、山

水、花鳥の挂幅及卷軸、畫扇等、禪林の名家に請ひて題贊を書せしむること、極めて盛に行はれき、當時朝家の文書、和歌、和文、消息乃至繪卷物

奇風

日

の詞書等には、世尊寺流の和様専ら行はれけれども、この種の書畫に至りては、家々各々特色あるに拘らず、大抵謂はゆる五山風にして、宋元の書體に屬せり。これ蓋し當時流行の繪畫の主として禪林の墨戲に沿原し、而も玩賞の社會、趣味の司命の全く禪宗の僧苑に在りしのみならず、その題贊者の殆ど皆五山の禪僧なりしが爲に外ならざるなり。而してその畫者、贊者共に皆印藏を用ゐる。畫者の印藏は前時代の榮賀等既にこれを用ゐしこと前に見えたるが如く、本朝畫史にも、近世不言貴賤、繡素染繪、作詩文必有朱印、是乃建仁、元久之間、禪門流布于世、而後自效於中華僧所爲以來、畫師亦如斯、在昔之倭畫、不見有印、雖土佐家、又然、彼筆緣起草紙之尾、記其官位氏名也耳、と言へり。然れども、その盛に用ゐられて、全く必然の風と爲りしは、本時代に入りての事なり。されど當時篆刻の専門家とて聞えたる者、殆ど史書に見えず。僅に碧山日錄長祿三年十一月六日の條に、玄兄工彫鐫於印文、余以雲泉野衲之字、需之、兄乃諾許矣とあり。鐵舟和尚圓浮集に、和侍者雕印と題して、壁山篆出太虛空、點畫分明字々紅、錦上添花何不可、昆虛正印在其中、の詩ある等に過ぎず。想ふに、草畫の墨戲と共に、往々禪僧の篆刻を能くせる者ありて、多くその手に成りしならむ。然れども、當時尙篆刻の専門家なく、篆學は未だ興らず、印文多く杜撰なりき。

畫贊の進行

畫贊の大に行はるゝや、繪畫は殆ど實位に在りて、詩題を課するに供せられ、題贊の詩章寧ろ重きを爲せるもの頗る多かりき。謂はゆる詩軸にして、當時最も賞せられたり、畫は全幅の下方數分の一に過ぎざるに、題詩はその序記と共に空位を填め、贊者往々十數員に及ぶ。蓋しこれを壁間に掛け、詩文の清賞に兼ねて、風雅の交友の高く且廣きを誇る所以ともなりけらし。禪林詩文集、この種の序記詩章頗る多く、且その命題の同じきも少からざるは、即ちこれが爲なり。後に掲ぐる如雪の瓢帖、圖明光筆と稱する溪陰小築詩畫及周文の竹齋讀書詩軸等の如きは、この種の遺品中の好例とす。原林詩文集、宋時軸とありて、題圖ありしこと、明なるし、のほ、後出畫題の條に見ゆ、參照すべし。

畫贊の進行

畫贊の事の隆涼軒日錄、臥雲日件錄、碧山日錄等に見えたるもの、略左の如し。

永德二年三月二十日 伏見上皇特遣家僧梵均書記、書此十牛圖一軸、并御札一封、者、來等持禪寺、命住僧小菴、周僧傳爲後序、具載歲月及授受之由、中墨周僧傳後、上皇親染、批于表紙曰、此軸、夢窓國師以觀應辛卯(二)歲、進先皇、光明院、光明院又以延文戊戌(三年)二月九日、賜予小子、空華集、伏見上皇御府所藏十牛圖後序。

應永十四年十月十七日 妙香天讚事、勅筆申所望、教豐持參也、教言、御記樂事、拔萃、同月廿四日の條にも、妙香天讚事、茶裏へ申入之處、宸筆にて嚴重に被遊之、被授下之候、悉是存候也と見えたり。

同三十四年七月 慧峯祖森首座、自號大林、一日、寄長幅之書軸、求冠其上於一辭、(中略)時應永三十四丁未秋七月下休日、書于曹溪南欄之下、樹極見、(傳物館粉本山水畫軸題畫記)

永享八年九月二日 御除子畫圖贊之事、被仰出、隆涼軒日錄

同九年五月一日 御屏風贊詩之兼有命、謝之、同書

披仙泛願圖 東坡詩集卷之五 披仙泛願圖 東坡詩集卷之五 披仙泛願圖 東坡詩集卷之五

空東坡 東坡詩集卷之五 空東坡 東坡詩集卷之五 空東坡 東坡詩集卷之五

潘閣騎驢圖 梅花無盡空花集 潘閣騎驢圖 梅花無盡空花集 潘閣騎驢圖 梅花無盡空花集

种放歸山圖

和靖隱居圖 東坡詩集卷之五 和靖隱居圖 東坡詩集卷之五 和靖隱居圖 東坡詩集卷之五

竹溪魚蟹圖 李及中防和靖圖 竹溪魚蟹圖 李及中防和靖圖 竹溪魚蟹圖 李及中防和靖圖

李白觀瀑圖 東坡詩集卷之五 李白觀瀑圖 東坡詩集卷之五 李白觀瀑圖 東坡詩集卷之五

四皓圖 東坡詩集卷之五 四皓圖 東坡詩集卷之五 四皓圖 東坡詩集卷之五

山水小舟圖 南唐畫 山水小舟圖 南唐畫 山水小舟圖 南唐畫

家重放鶴圖

西湖晴雪圖 東坡詩集卷之五 西湖晴雪圖 東坡詩集卷之五 西湖晴雪圖 東坡詩集卷之五

遠山歸鳥圖 東坡詩集卷之五 遠山歸鳥圖 東坡詩集卷之五 遠山歸鳥圖 東坡詩集卷之五

春江送別圖 東坡詩集卷之五 春江送別圖 東坡詩集卷之五 春江送別圖 東坡詩集卷之五

落梅曲圖

長樂宮圖

多景樓圖

戴逵破琴圖

木犀枝上白頭公圖

淵明畫像 東坡詩集卷之五 淵明畫像 東坡詩集卷之五 淵明畫像 東坡詩集卷之五

五柳先生圖 東坡詩集卷之五 五柳先生圖 東坡詩集卷之五 五柳先生圖 東坡詩集卷之五

杜甫像 東坡詩集卷之五 杜甫像 東坡詩集卷之五 杜甫像 東坡詩集卷之五

桃花蒼鷹圖 無盡空花集 桃花蒼鷹圖 無盡空花集 桃花蒼鷹圖 無盡空花集

墨菊 正竹 東坡詩集卷之五 墨菊 正竹 東坡詩集卷之五 墨菊 正竹 東坡詩集卷之五

蓄菽洞圖

君山圖

寒江獨釣圖 東坡詩集卷之五 寒江獨釣圖 東坡詩集卷之五 寒江獨釣圖 東坡詩集卷之五

單于昭君夜坐圖 九淵詩集卷之五 單于昭君夜坐圖 九淵詩集卷之五 單于昭君夜坐圖 九淵詩集卷之五

蓄菽菽

寒林獨鳥圖 九淵詩集卷之五 寒林獨鳥圖 九淵詩集卷之五 寒林獨鳥圖 九淵詩集卷之五

松竹梅圖 東坡詩集卷之五 松竹梅圖 東坡詩集卷之五 松竹梅圖 東坡詩集卷之五

秋色歸思圖 東坡詩集卷之五 秋色歸思圖 東坡詩集卷之五 秋色歸思圖 東坡詩集卷之五

鴻鏡圖 東坡詩集卷之五 鴻鏡圖 東坡詩集卷之五 鴻鏡圖 東坡詩集卷之五

蘭竹圖 東坡詩集卷之五 蘭竹圖 東坡詩集卷之五 蘭竹圖 東坡詩集卷之五

佳人覽鏡圖

漁樵問答圖 東坡詩集卷之五 漁樵問答圖 東坡詩集卷之五 漁樵問答圖 東坡詩集卷之五

春山煙雨圖 東坡詩集卷之五 春山煙雨圖 東坡詩集卷之五 春山煙雨圖 東坡詩集卷之五

琴高生騎鯉圖 少林 琴高生騎鯉圖 少林 琴高生騎鯉圖 少林

太乙真人蓮葉圖 東坡詩集卷之五 太乙真人蓮葉圖 東坡詩集卷之五 太乙真人蓮葉圖 東坡詩集卷之五

三峽圖 大有無盡空花集 三峽圖 大有無盡空花集 三峽圖 大有無盡空花集

松下讀書圖 東坡詩集卷之五 松下讀書圖 東坡詩集卷之五 松下讀書圖 東坡詩集卷之五

越女浣紗圖 東坡詩集卷之五 越女浣紗圖 東坡詩集卷之五 越女浣紗圖 東坡詩集卷之五

邵平瓜圃圖 九淵 邵平瓜圃圖 九淵 邵平瓜圃圖 九淵

山鷄書天

鴻門宴集圖 東坡詩集卷之五 鴻門宴集圖 東坡詩集卷之五 鴻門宴集圖 東坡詩集卷之五

蓄竹 蓄菽 東坡詩集卷之五 蓄竹 蓄菽 東坡詩集卷之五 蓄竹 蓄菽 東坡詩集卷之五

富士圖 無盡空花集 富士圖 無盡空花集 富士圖 無盡空花集

湘妃圖

仙人吹簫圖
 松竹二愛圖
 江山小隱圖 其風韻にもあり
 折枝梅花圖
 梅華書齋圖
 春江白鳥圖 其風韻にもあり
 三益齋圖
 剡溪歸舟障子
 畫水
 滕王閣圖
 王樂登樓圖
 廬山瀑布圖 空筆集に廬山圖あり
 江山小景竹居清事にもあり、空筆集に小景竹居清事に山水小景あり
 野橋梅雪圖 無畫圖にあり、以上畫叶集
 野渡喚舟圖
 玄都觀看花圖
 月夜看湖圖
 柳街接過圖
 籍田圖
 温公獨樂園圖
 曲江宴進士圖
 升鶴圖
 賈島推敲圖
 避暑宮圖

溪山隱處圖
 搗衣圖 以上心田詩話
 春郊賦饋圖
 折枝菊花畫軸
 漁村白鷗畫軸
 睡陽雙鹿圖 以上九淵詩話
 牧牛圖 横筆小畫
 碧山佳處圖 丁未季書、以上村塾小稿
 岩頭船居圖
 翠岩示眉毛圖
 畫虎
 魚籃觀音屏居集(魚籃相)不二遺稿にもあり
 靈昭女若木集にもあり
 六祖無量壽、草餘集、無畫圖(六祖半身)にもあり
 隱居士製竹流障圖 無畫圖に上隱居士靈昭女圖あり
 大惠宏智掛旗圖
 白樂天像
 羅漢遊淫坊圖
 四隱圖 無畫圖、竹居清事、不二遺稿にもあり
 童子南詢圖 其風韻に善財童子南詢圖あり
 障濟畫像屏居集、草餘集等にもあり、以上狂畫集
 山谷像 無畫圖にもあり
 晴隱過雪橋圖
 梅殿四時畫梅

屈原像

秋江釣魚圖

江山雪裡梅竹

楊柳春雨圖

柳子厚種木樹花圖

張良造屋圖 無畫題に「清湖府將軍張良造屋圖」あり

礪溪圖

白鷗圖 以上無畫題

晚江釣魚圖

杏林圖 立竹透簾に「杏林圖」あり

竹林七賢 無畫題に「七賢圖」あり

釣魚圖

買臣擔薪圖

呂尚釣魚圖 無畫題に「太公釣魚」あり

暮村飯糧圖

三秋書 無畫題に「三秋書」「三秋書時」「三秋書景」あり、以上鳥

仙山樓館圖

梨花汀洲圖

芭蕉夜雨圖

希布夷睡圖

陸放翁書樓 無畫題に「放翁書樓」あり

書樓書案

書齋(有竹木) 無畫題に「あり

白傳香山遊景圖

書屋像 無畫題に「書屋像」あり

宋太祖胸毯圖

道士欠伸圖

山水冬景圖

種王八腹圖

睡足齋圖

八景圖 東海一區集空甲集に「八景圖」あり

雨中擁傘

荷葉遊魚

風雨蜻蜓圖

墨牽牛

王母獻桃圖

飲中八仙圖

蚌書

牛無畫題に「あり、以上立竹透簾

盧同煎茶圖

王荆公騎驢圖

半山圖

巫山雲雨屏風

秦郊散馬圖

三機連行圖

華尊樓宴集圖

碧桃雙禽圖 屏風

山茶飛鳥圖 屏風

梅花、梅下官女、小扇

小書山、山、有、梅、松、一、輪、毫、人、變、參、下、有、舟

國、甚、畫、軸

屏、風、高、會、南、烟、一、風、停、在、枝、上

屏、其、一、枝、上、白、梅、其、一、三、禽、之、中、梅、花、枝、上、大、鳩、二、禽、不、知、名

吳、商、鑲、舟、持、是、鴨、畫、障

酒、上、塔、影、同、前

溪、橋、深、樹、同、前

林、隈、酒、旗、同、前

瘦、龍、落、雁、同、前

雨、聲、觀、瀑、同、前

淮、村、獨、歸、同、前

郊、墟、新、涼、同、前

二、釋、瓶、月、同、前

值、雪、傾、傘、同、前

江、鄉、遠、帆、同、前

煙、波、獨、釣、同、前

殺、風、景、打、竹、屏、風、畫

一、鶴、飲、翼、立、同、前

白、鷺、同、前

濕、布、同、前、畫、軸、し、あり

曲、水、流、觴、屏、風、畫

山、隈、小、堂、同、前

行、人、携、杖、沙、林、端、同、前

山茶長春并玄真小鳥圖

紅牡丹圖

王思技劍逐蠅子圖

月々花水仙花圖

陸績懷橘屏風畫

斑衣老萊同前

梅枝兩雀同前

深梁莊意同前

大椿樹下雙鶴同前

寺前有荷杖之人同前

松下那堂二人對話同前

雲山真倪同前

水仙花同前

芙蓉紅蝶同前

野菊蟻歸同前

畫軸有魚盤尾

蠻女蠻郎並書畫軸

觀音畫京師集、河、北、集、唐、集、東、海、一、區、別、集、若、木、集、草、蟲、集、雜、畫、授、稿、不、二、遠、稿、し、あり

普化和尚

釋迦像草蟲集、雜、畫、授、稿、若、山、日、輪、し、あり

維摩居士像不二遠稿に、し、釋、名、居士、あり

瀟灑之文殊

文殊騎獅子手持經卷圖、河、北、集、に、文、殊、畫、子、東、海、一、區、別、集、草、蟲、集、雜、畫、授、稿、不、二、遠、稿、し、あり

騎鯉魚觀世音

出山釋迦像 東第一區所集に「出山」あり、龍畫後稿に「出山」あり

布袋 前有三小童、有如意寶珠、東歸集一區集、若木集、龍畫後稿、草餘集、竹居講本、
不二達磨、西北集、前有小兒、出山集、神居集、龍畫後稿に「あり」

仙人持花籃圖

釋迦、觀音、達磨、孔子、老子五人一船、此中達磨取楫

降魔釋迦

龍虎二輪

筍圖

書馬 一馬老而後一馬壯而肥、其後者凱圖、其肥者懶耳、知圖

雪江齋詩軸

斷崖小船圖

麻姑圖

蓮葉觀音

半身文殊 不二達磨に「あり」

栽松道者

布穀

豐干若木集に「あり」、西北集に「豐干」あり

鯉魚

山水、花鳥四齋軸

山猿畫像

畫軸中有小童二人見之

神農

紅白木芙蓉齋軸

枕流齋詩軸

鷗臥齋畫軸

徑山鳴石巖圖

畫題、神農集に「あり」

義牛防狼 以上梅花齋畫

喬雀東歸集

楞伽勝會圖

白衣觀音 月在波底

觀音入定相

大道跨龍 以上西北集

花下三人賦詩圖

藤上安琴圖

放牧圖

一牛圖 以上龍圖集

羅漢赴龍王齋圖

觀子和尚 松山集に「觀子」あり

猪頭和尚 以上神農集

無邪真人圖

瑞麥圖

觀音海上觀月相

趙氏孝弟之圖 以上神農集

海國 莊嚴集に「海國」あり、其後稿に「海國」あり

李源訪圖 澤園 以上松山集

過水羅漢 東歸集、後達磨に「あり」

文宣王

列子

莊子

軍士圖 以上東海一區集

佛誕生

地藏草集 異書 遺稿 不二遺稿 にもあり

十六羅漢 以上東海一區列集

秋實牛圖 遺稿 にもあり

郁山主 以上若水集

書芭蕉

釣魚圖 香山日録 にもあり

靈山會上圖

書 以上國傳集

江山圖 異書 にもあり

竹老

魚蟹二書

探薇圖

歸樵圖

二高僧畫像

亮座主見馬祖禪會圖

松下經函圖

群兒圖

墨紅梅 異書 にもあり

洞庭秋月圖

六代祖師并宏智頂相

草堂南隣圖

蕭郎持圖

藍圖馬雲圖

幽蘭小隱圖詩

秋江軸 以上空華集

出塞圖

千里明月書軸 遺稿 にも千里明月圖あり

白雲山房書軸

西湖歸舟圖

書 遺稿 にも異書 にもあり

歸田圖

江天暮雪圖

梅花野處圖 異書 にもあり 以上遺稿集

石勒參佛圖 澄圖

諸祖圖 以上明海集 遺稿

蟹圖 異書

不勸圖 遺稿 不二遺稿 にもあり

趙州草鞋集

秋樹暮鐘圖

香月小虛圖

清碧齋圖

青山獨往圖 異書 にもあり

海山春曉圖 同前

水雪窩圖

春樹暮雲圖 以上遺稿集

金山書翰
 孤松獨鶴圖詩
 水石佳處軸
 海嶽孤雲 其墨蹟にもあり、以上御書後編
 雪月梅書軸
 松泉齋書軸
 陳國南
 芭蕉秋雨圖 其墨蹟にもあり
 濠梁觀魚圖
 金剛仙人辭渡圖 其墨蹟にもあり
 若耶溪圖
 春江聽雨圖
 二陸入洛圖
 舟中醉眠圖 又墨迹併墨蹟あり
 桐敷催花圖
 仲夏山水圖
 夕佳樓書軸 其墨蹟にも、夕佳樓圖あり
 湘西別業書軸
 吸江圖 以上御書後編
 秋林高士圖
 松下梵僧圖
 新亭宴集圖
 寒岸孤鳥圖
 雪堂圖

雪月圖
 西齋讀易圖
 花下彈琴圖
 瀟湘晚景圖
 書雙蝶
 豐車圖
 慈鳥反哺圖
 臨春閣宴集圖
 群賢圖
 鄭虔書柳葉圖
 桃源春曉圖 又繪墨蹟あり
 李陵臺圖
 抱琴尋寺圖
 柳禽圖
 唐文宗與柳公權聯句圖
 琴書自樂圖
 枚魚圖
 水殿納涼圖
 懸崖老樹口
 伯牙學琴圖
 杜陵草堂圖
 村學試遺圖
 樊公綠野堂圖
 鍾呂傳道圖

- 巢父許由圖
- 李札掛屏圖
- 賀季真歸越圖
- 雲江小景
- 村田樂圖
- 張昇之結核圖
- 春雲出谷圖
- 華尊樓宴集圖
- 碧桃花書卷
- 子猷訪戴圖
- 書障畫譜卷
- 春江白鷗圖
- 秋林歸隱圖
- 江船春晴圖
- 別時孤雲圖
- 山陰茅宇圖
- 松樹小隱圖
- 松泉書

- 白雲深處圖
- 秋水泛舟圖
- 湖山雪後圖
- 墨竹石
- 江天遠望圖
- 遠涼軒書
- 葵扇分菴圖
- 壁畫嚴漢以上真景
- 江水小景以上竹屋精事
- 李嗣泰藥山像
- 漁村夕照
- 春溪漁舟圖
- 溪橋瀑布小軸
- 濠溪愛遠圖以上不二堂書
- 洞天福地圖
- 繡軸圖
- 水墨圖以上善山日錄

繪畫の掛幅

如上の繪畫は、屏障の外皆これ掛幅なりき。佛教畫の掛幅は古よりありき。雖も、玩賞の繪畫は、前代に至るまで、殆ど屏障及卷物に限り、ただこれを挂幅にして壁間に展觀することあらざりしもの、如くなるに、本時代に至りて始めて盛に行はるゝを見る。蓋しその裝潢は、全く古來佛畫に懸けて禮拜せし佛教畫に倣ひしなれど、これを玩賞繪畫に用ゐるは、舶載支那畫の形式を學びしならむ。これより後、挂幅は繪畫裝潢の最も普通なる形式と爲りて、以て今日に及びぬ。先に言へる繪卷物變體の挂幅及羅漢圖水墨觀音圖等の如き非嚴正なる佛教畫は、この變遷の過渡を爲し、ものとも視るべし。

屏風の形式及作法

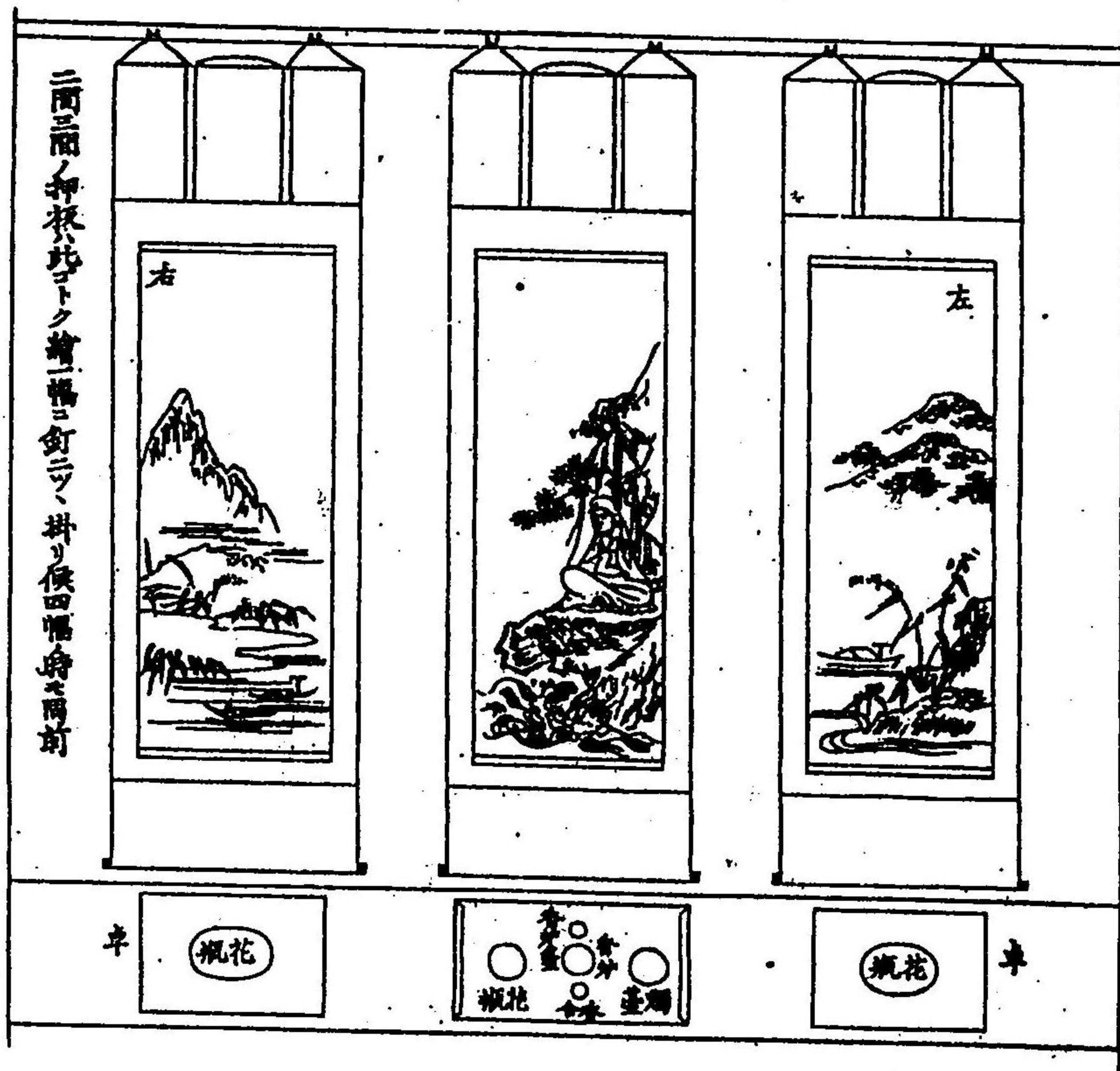
玩賞繪畫挂幅展觀の形式は、初めたゞこれを壁間に懸け、後書院造りの建築乃至茶室の發達に伴ひて、床之間の出で來し後は、専らこれに

卓、三つのあいも同じ物たるべく候。本尊の卓の大小により、脇の卓は寄り除き有べく候。脇の繪に卓のあい候ことまれに候。口傳候也。
 押板は上に調を高くさせられ、釘を重々にうたせられ、繪の長きは上の釘にかけ、繪の短きは下の釘にかけられ候。尚短き繪の時は、折卓を立られ候。大なる繪は一福を釘二つにかゝり候。小繪は釘一つにかけられ候。はり糸は柱の角のめんにつばを打、琴の糸をはられ候也。押板より二尺ばかり候て可然候也。

四幅對の繪、如此掛り候。小圖第二十六三具足有べからず、中には花瓶を置、脇にも花瓶、已上三つををかれ候て可然候。又中には何にても香爐を置れ候も可然候。胡銅、青磁取合せられても不苦候。押板大小ともに可爲同前、風鈴は押板の前一こへいをきて、天井につられ候。又何處にても可然在

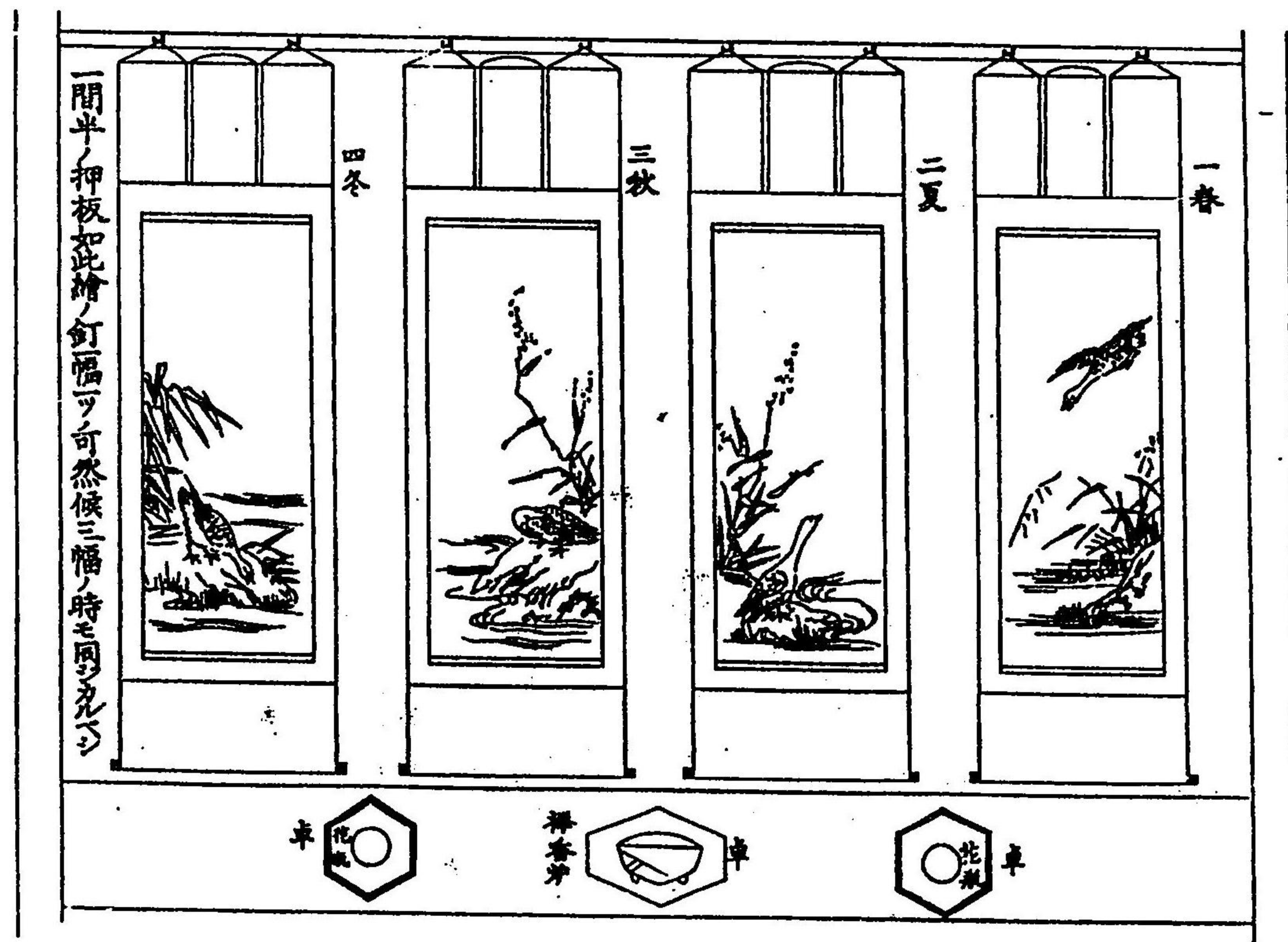


小圖第二十四 繪掛抄圖

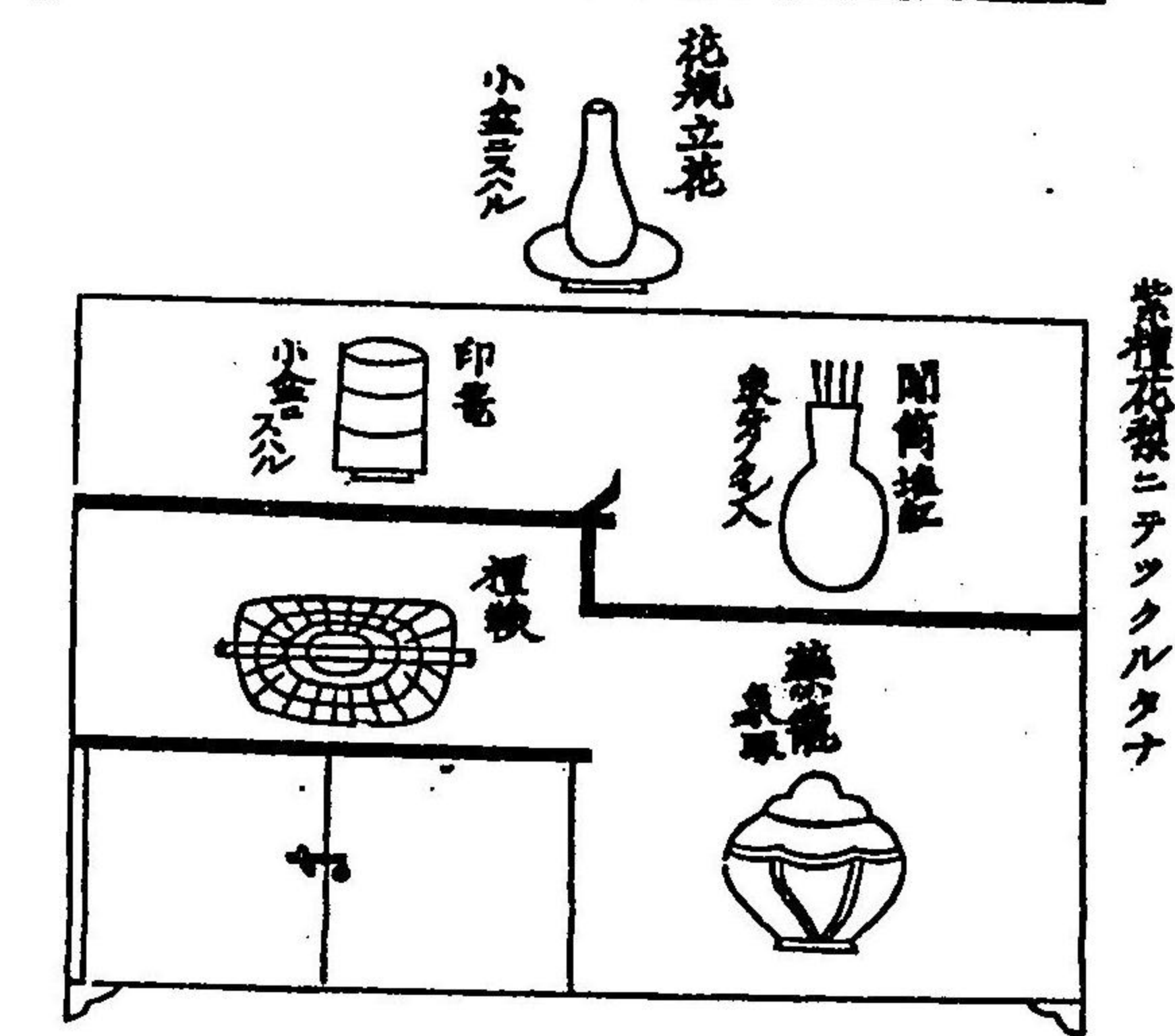
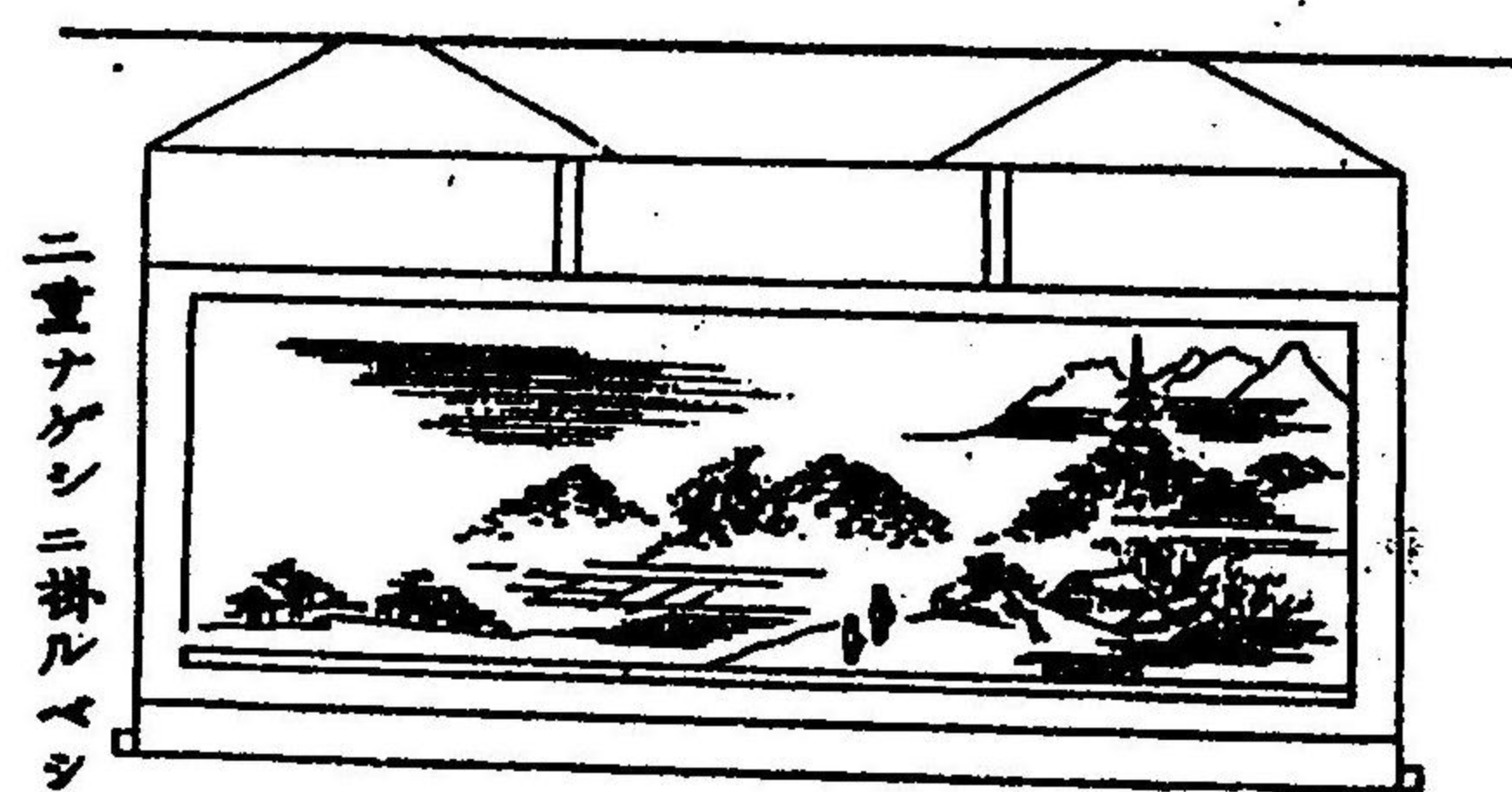


小圖第二十五 右左開扉掛抄圖

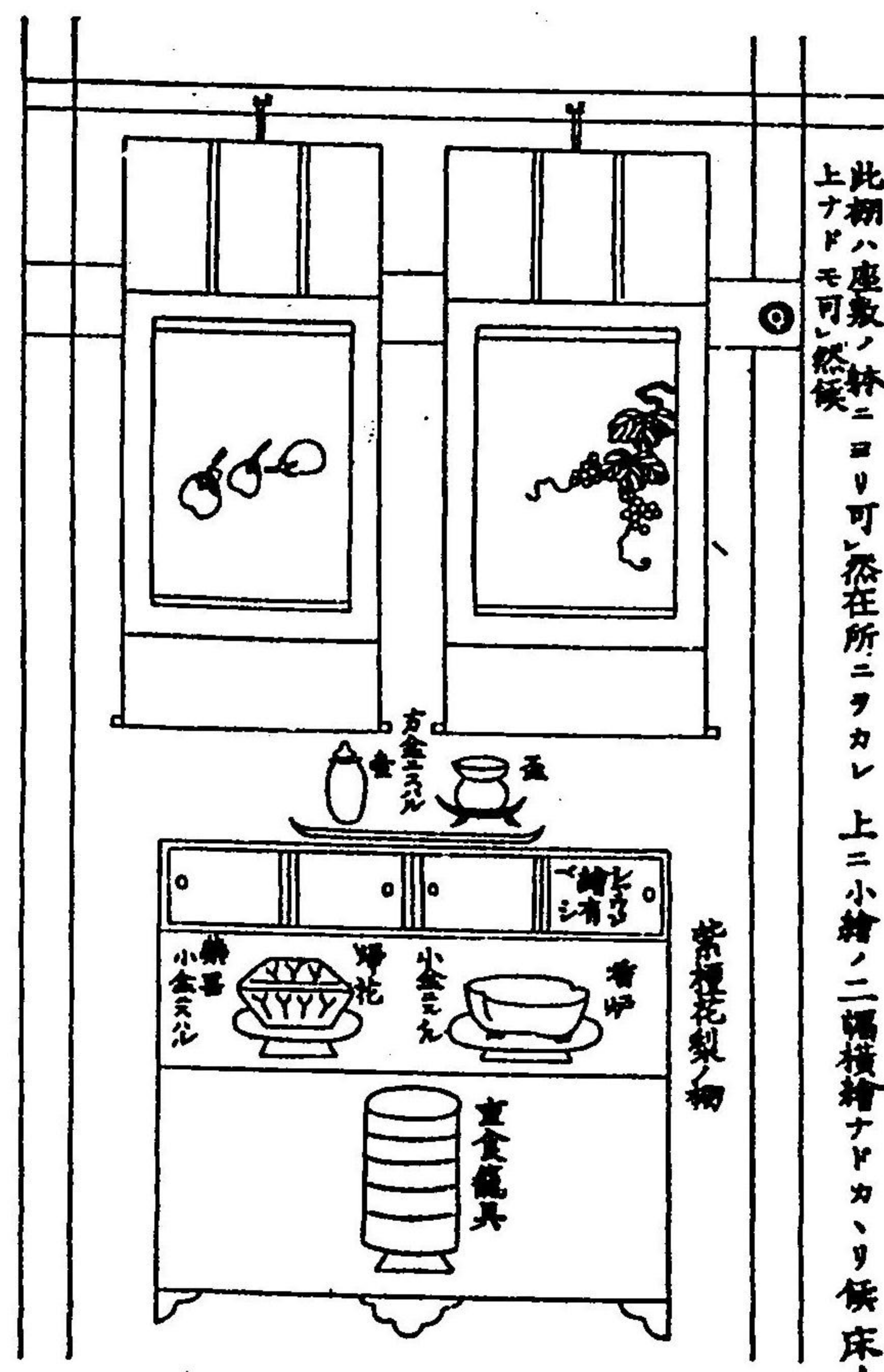
二面三開の押板此下ク繪幅ニ釘ヲ、掛り候四幅繪を兩前



圖繪記帳右左觀圖君 六十二第圖小



圖繪記帳右左觀圖君 八十二第圖小



圖繪記帳右左觀圖君 七十二第圖小

所につられても不苦。

中央卓上に、何にても香爐、飾花藥器二色をかれ候。押板より國中のけてをかるべし。

五具足と申候て、鶴梅蓋一對花瓶一對、香合、香匙蓋をかれ候。飾物とも申候。對したる臺花瓶なき物一で候。そろひ候は可爲重寶候。

此棚は座敷の體により、可然在所にをかれ。上に小繪の二幅、横繪などかゝり候。床の上なども可然候(小圖第二十七)。

此連棚も、座敷の體により、かたへよせられ置れ候。其上の天井の二重なげしに釘を打て、小繪、横繪以下如此掛り候(小圖第二十八)四幅一對、八幅

一對の繪は、何も座敷の二方の小壁に可掛候(以上君臺觀左右候記)

四幅一對のときは、三具足不致置候。脇之一對花瓶如此。中は又もと大なる花瓶可然候。不然は大成香爐を可置。四幅之時、本かざり如是候。三間にて候。

二間、また一間間中も、可爲同前候(圖略す)

昔小川御所御會御かざり、然と覺不申候。其後慈照院殿様御座敷御かざり覺申候分、覺しるし申也。

一。小川御所御對面所五間二間、押板南向御かざり有。御繪三幅一對如常。三具足御卓にすはる。同脇花瓶一對、卓にすはる。上に風鈴懸る(圖略す)

二。繪の掛様之事、第一に中算をかり、第二左、第三に右をとき、掛竿もて風袋分程かけおろし、其後は手にてかけ候也。何も同前、ひすみをよくく見て、

軸をなをし退候。まき候時、懸候ときのごとく、次第に寄候。又左よりかたはしにもまき候也。緒のさばきにいろく口傳あり。三幅の繪の間同も

のなり。押板の三具足、卓脇の卓との間も、同もの五幅一對のときは、莊同前、四幅のときは、變り候也。

一。押板三間、二間、一間まな、同前也。

一。此押板のつゞき、西の一間にも、小繪二幅一對かゝりて、その下に曲懸けひしやうのくりくをたてらるゝなり。

二。西の御所五間、南向、北の西より一間まなかの御床有。上に押板あり。御繪三幅一對、つねのごとくかゝる。三具足、脇花瓶も如常。上に風鈴懸る。

三。東山殿御會所九間、壁紙の間北東二間、押板あり。牧溪の繪に座堂和尚の講、三幅一對常のごとくかゝる。三具足、脇花瓶も如常。風鈴かゝる。押板の前の中の卓、

堆紅をかるゝ。上に胡銅のすべり香爐、まへに飾花の茶器を置るゝ也。

二。八景の八幅、玉四幅一對の横繪、東西の小壁にかゝる。

一。西の六間、御置物なし。夏計、小壁に四幅一對の繪を東西に二幅宛かけらるゝ。

二。同北のかきつゝじの御間、西北の一間に連棚をかるゝ。紫檀なり。棚のうへの小壁にちいさき横繪二幅かゝる。棚の置物如是。障子の繪、秋の草花、ま

せ垣を畫申候。

一。同北の石山の御間、東北の一間方なる床あり。上押板有。三間、三幅一對の繪、幸直。三具足如常。東のまなかの連棚、置物如是(圖略す)障子繪、石山、勢田、大

津まで御座あり。

二。同北向東のまなかに、ちがひ棚あり。上にあぶら火の道具ををがるゝ。二枚障子こまかなるさまなり。具の木にて内よりはらるゝなり。下の置物如

是(圖略す)座敷の繪馬、遠繪さまく花鳥なり。

一、同西御茶湯の間に、西北一間欄有、御書物小川御所のごとく、御障子の墨繪山水、夏圭様、馬遠様。
一、御書所、馬遠様山水人形、御納戸透欄あり、御書物なし。

二、同西の六間、御湯殿の上、玉欄様の山水、御書物なし。

一、畫の御座所の玉實に、四帖敷の御間有、ひがしむきに一間の御書院有、つねのいびつなりの花瓶、古銅の物に華立られて、只一ををかる。戌亥の角に御座欄ををかる。墨繪の横繪一幅かゝる。欄の上には御文書を置れて、書具本御抄物一帖ををかる。其外漢書ををかる。御座敷には色紙ををかる。御書院の脇には官女二幅、王立本筆を置る。

二、次の南の間、戌亥角透欄、上に文書、双紙一帖ををかる。横繪墨跡ををかる。

二、中央卓、繪より間中のけて可置。

二、繪一幅懸て、三具足置事不苦候、三幅一對かけて、三具足無は略儀なり。

二、二幅一對のとき、中に花瓶一可置。

一、二幅一對の時、一對花瓶可懸、繪の前に一づゝ可置、其時は中に花瓶不可有之。

一、繪かくる次第、先本筆、次に左、次に右、四幅一對之時、左より始て、一二三四とかくるなり。

二、同座敷に二幅一對之繪を懸て、又押板などあらば、二幅一對またもかけ候以上御飾記。

繪の形式

畫幅裝潢の形式も、本時代に於いて漸くその風を成し始め、後茶道の大成に伴ひて、終に法式の全く一定するに至る。蓋し古來の佛教畫及輸入の玩賞畫に倣ひ、更に裝潢誌及思陵書畫記の定式を取りしならむ具さにこれを次編に敘すべし。

繪の懸

社交上通途の贈答は、畫扇を用ゐること最も多く、遺明使の贈品中にも毎に屏風と畫扇とありき。殊に畫人の正月、六月等に將軍家に伺候する折には、必畫扇を獻するを例とせり。されば長祿二年以來申次記には、畫扇獻上の作法について記して曰へらく、一、藝阿進上御扇事、申次御對面所之さいのきはへ、御扇を二持參申て、藝阿進上と申入て、頼而持て罷立て、扱藝阿懸御目也。又宗吾大草紙にも、もの披露の事の條に、又相阿彌進上の御扇、正月四日、御對面之時、御目にかけて候、能阿彌の時より如此とあり、殿中申次記にも、正月九日の條に、一、扇一本、水正條に、御書院上、の狩野大炊助、正月晦日の條に、一、御扇一本、水正條に、御書院下之、の栗田口民部丞、六月晦日の條に、この二人など録したり。左にこの種の史徴を列記す。

應永八年、扇百本、屏風三雙、續遺明、善隣國寶記

同九年、金屏風三副、書扇壹佰把、同前、同書

永享七年十一月九日、西洞院殿就梅家庭扇可製事、賜狀、御器之御目、然、以景阿先約故、被棄之、藤原軒日錄

文安四年十二月廿三日、九洲西堂來、茶話移刻、因及紅羅亭之裏、十日、九洲使某人就于求畫扇、其扇面書宮殿人物、前有紅梅數株、某人曰、江南紅羅亭

也、今問之九淵、則曰、未見所出、江西會作此詩、亦未知所出、重南唐書中亦無此事、(臥雲日件錄)

長祿元年「管領廣成院殿(中)太田入道に命じて、武州河越の南、仙波城を(中)遷移し、即城を築けり、北方此城の鎮守三芳野天神の宮居まします(中)遷

御神林は朝の五本骨の扇を納め奉り、御寶前の殿飾にも、みな扇の繪に書たり(永享記)

同二年正月十八日「南院本坊御成(中)御引物、蓮唐扇子十柄(藤政軒日錄)

同三年正月廿八日「龍雲寺御成、煎點、唐扇子十柄(同書)

文正元年正月廿九日「等持院開山塔始成、又安開山像、仍御燒香有之、御扇子廿柄(中)遷殿之(同書)

文明四年十月三日「裝金屏風貳張、硃書扇貳佰把(義政建朝辭、善隣圖實記)

同七年八月廿八日「貼金屏風參扇、扇壹佰把(同前、同書)

同十五年三月「貼金屏風參扇、扇壹佰把(同前、同書)

同十六年八月五日「藤隆有基書團扇之惠(藤軒日錄)

同十八年七月廿九日「與彦龍持扇子地二枚云、有人請贊、作之也、蓋爲貼屏也、總計六十枚有之云々、書様、一枚者莢花、花側有蛇虫二、一枚者瀟紙有杜若

杜若中有斷續、橋側莢衣冠之官人、一箇有之、所謂三河八橋、(藤政軒日錄)

同十九年正月廿三日「遷往等持寺、先仲新年賀、送以書扇二柄、杉原十帖(同書)

長享二年正月廿三日「遷往等持寺、持書扇、杉原、以仲年始賀(同書)

同三年正月三日「仲清持抹茶一器來、書例也、愚乃嘆之(中)遷茶了、贈以白雲書扇(同書)

同年同月晦日「杉原十帖、書扇一柄、以拍悅、見贈新見三郎左衛門尉宅、同書扇一柄、其息次郎三郎方隱之、書扇也、若者書扇也、文思來(中)遷與之以扇一本、白雲(同書)

延徳二年正月廿二日「書扇一本、圓杉原十帖、贈藤盛寺、謝詞丁事(同書)

同年五月十六日「自讃州、扇書屏、杉竹、繪金屏來(同書)

永正十三年八月「裝金屏風二張、硃書扇二佰把(大内義興遺朝辭、讀善隣圖實記)

永祿十二年「或時、義景墨繪に牛を書たる扇子を以て、心月寺財應と申和尙に向て、扇子は進ずる、牛をば此方へとありければ、和尙其扇子を把て、(中)

畧)又或時財應扇子繪に帆懸船の有を出し、義景に向ひ、此船は何地へ着き申んやと有りければ、義景其扇子を返て、此うらへ着候と答給ひければ、和尙答話如願水と義景を拜し、我申り、朝倉始末記)

扇の畫

當時畫扇の玩賞は、昔に上記の事實に徴すべきのみならず、扇市の事は、宜竹殘稿に見え、その餘禪林の詩文集に、その題賛の製作極めて多く、空華集の如きは、青絹畫十二柄、題扇面四十二首等あるを以て、一層その流行の狀を詳にし、又その畫の命題、圖相を考ふることを得べ

杜市飯類圖
 劉伶酒壺圖
 布袋
 慶應工竹理類にもあり以上竹器小類
 秋鳥圖集
 老松寒鴉
 小景一見泛水
 牡丹書楊妃
 竹外桃花
 葡萄
 漁父屈原
 仙翁仙嗣以菊花
 蟹奴
 烟柯山
 鹿居士靈昭文
 竹生鳥不二遊類にもあり
 仙客橫笛圖
 牧馬以上鳥圖集
 雨鶴
 山茶
 竹林七賢無靈圖にもあり
 白鷗
 白葵花
 西伯太公

壽星像
 修竹圖鳥圖
 石山
 牛女
 曉窗梅等
 湯以上工竹理類
 陸放翁
 芙蓉
 陶淵明
 村田樂
 翠障所貼扇面圖 蓮扇有雲字
 唐先生詩圖
 杜若
 漁人
 書有伶人、其有雙鶴
 三笑坐聯集にもあり
 竹數竿
 雙鹿有柳有江
 白鹿綠龜、仙人持麈尾
 長春花下有鳥、號火燒
 楊妃吹笛圖
 楊梅盧橘并茄子
 八景
 芙蓉傍有彩羽

高山流水及蟾月有之
柳下繫蓬
舟人鳥鬼，柳上春雲
黃菊
女牆有櫻花，嶽上有半月
折枝梅實
紫藤花、杜鵑花
紫藤花纏欄干，紅梅開，黃鹂臥地上
梅枝有雪
三鷗
楓
六童遊戲，或挽羊車，或抱舞雉
群花飛鳥
有紅白之鸚鵡，有宮樓之餘韻
有人抹藥
兩童舞，三童擊瑟
其面亂雲飛瀑，其裡風簾二鳥
花有藤
香匠造詩字圖
柳下有機具之絲
白鷗驚飛
張良進履圖
款十白菴
青牛

呂洞賓背劍渡波圖
梅花枝上雪
唐扇書武庫鳥
花鳥
菊花
滿地黑雲有活龍
蓮
展樓
燕
石菖蒲
白杜鵑花，紫藤乘其上
三人對話
二老圍棋
犬追物
牛背有立人持鞭索，裏飛瀑一條
鮎魚
亂鴉
許由
陽有龍，陰有虎，以上梅花無畫
琴高騎鯉圖
雉
雪江獨釣
竹雀
牧牛以上空筆集

紅梅松花

白梅松花圖

和州寄屋以上真墨

對棋、一人傍觀竹居書本

瀑布不二圖

雲裏紅長春花 雲山日鏡

書登州海市、裏寫藥真真日鏡

宋元繪畫乃至宋元風墨畫玩賞の流行は、上來述ぶる所に由りて既に略明なり。この世運は實に近世繪畫の洪基を開ける新興畫派を胎育して、その大發達を劇致せしものなり。南北朝の間は時に戰亂ありて、繪畫の鑑賞未だ盛なることを得ざりければ、作家にも尙名手の出づる者あるに及ばざりしが、王統一に歸し、世は小康を得て、室町幕府の盛代を現じたる應永の頃に至りては、專門の畫家として、殆ど宋元風墨畫の初祖とも稱すべき如雲を出し、如雲の門に周文を出し、周文の下名流輩出して、その盛運は宛も旭日の如くなりき。今如雲、周文を傳するに先だちて、これが先驅を爲し、禪僧墨戲の稍秀でたる可翁、梵芳及本時代の墨畫中稍少しく調を異にし、主として道釋人物を作りし明兆一派を敘せむ。

可翁の傳は本朝畫史、延寶傳燈錄等に見えたり。畫史に曰く、僧可翁稱宗然、號良全、南浦紹明之弟子、而虛堂之法孫也。每畫多有釋一山之贊、題名曰海西人良詮作、一作觀夫、人物佛仙、傳彩學顏、墨畫學牧溪、精骨法、故墨畫而無印者、世人誤爲牧溪之所畫也。傳燈錄に曰く、筑後人文保初年、與寂室光純、著俊入元、在元十年、歸主筑之崇福、移洛之萬壽、建仁、創建泉州禪通寺、爲第一世。晚居東山、天潤、養貞和元年四月廿五日寂。勅監普濟大聖禪師、高僧傳に曰く、得丹背之妙、世人至今得之者、靡不稱重。その畫款に海西人とあるに依りて、古畫備考の可翁良全考には、別に元より來朝せし同名の人ありと、宗然は繪をか、ずと斷じつれど、諸ひ難し。想ふに海西は九州を指して言へるにて、元人めかせしに過ぎざるべし。たゞこれと前章の良詮との別人なることは、貞和元年に寂せし人の、正平七年に畫史に言へる本國寺の羅漢圖を畫かむやうなきにて、明けし古畫備考に海西人良詮之作と署し、後出の寒山圖と同じき印識ある辨天圖川本町を錄して、絹地極彩色、岩の上にて琵琶を彈上、に松あり、前々より古土佐と申傳、熟覽の所、岩の中に海西人良全と云名書、金泥にて書と、言へるに、徵すれば、畫史に「傳彩學顏輝」とあるも、頗る信すべく、彩畫墨畫を併せ善くしけむ。されど今に存するもの、多くは水墨の粗畫なり。後出の一圖、既に然るのみならず、古畫備考錄する所の墨繪白鷺の魚をねらふ所、此畫古十種所藏、其明の外、牧溪の如き、觀音の人物、可畫の方印に下、小方印あり、天龍、香山、贊渡、江達、磨、同上等も亦皆墨畫なりしもの、如しその畫款に「海西詮無事之筆」とあり、又、海西人良詮之作と署して、思浩の印を用ゐたるものあるに、徵すれば、無事思浩等の別號ありしなり。名畫拾彙別に思浩を擧げて、能畫嘗見探幽粉本、其畫上有寧一山、贊、厥后亦見山水、翎毛、頗有應仁、文明之風格、未得其詳と曰へるは、蓋し誤れり。後出寒山圖の小印は仁賀と讀むべきか、明ならず、可翁風と謂ふべき者には、寄堂畫史に曰く、寄堂、見一

明兆門人として空翁を擧げ、更に明越、慧林、明越、慧林、文清、及春關、等を附載せり。その蹟竝に詳ならず。

如雪

明兆一派の墨畫は重に道釋人物にして、尙視て佛教畫の餘波と爲し、又その範圍にも屬すべきものなれど、本時代に最も行はれたる宋元風墨畫の本領は寧ろ山水、花鳥等に在りて、久しく禪苑の墨戲に弄ばれしが、眞に専門の作者として推稱すべき者は、如雪を以て嚆矢と爲す。本朝畫史に曰く、僧如拙、九州人、居相國寺、善畫山水、人物、花鳥、似南宋馬遠、夏珪、牧溪、玉澗、及胡元、頽煥、古來、倭手能畫者、未學宋元風、如拙始學之、大得其法、印文に如雪、如雪軒、其方、亂芳印、其方、等ありと言へど疑はし、便覽には、號亂芳軒と曰ひ、扶桑畫人傳は、相國寺中亂芳軒に住すと曰へり、古畫備考に、如拙二仙、幅の事を録して、その畫中に、應永廿一正月十八日、於南禪、柄真院、周文、谿居士、傳筆畫、于時、與之、萬年山下、如雪亂芳軒と記し、その圖本朝畫集にも出でたり、備考の増補者は欄外に記して、實物に就き子細に鑑査せしに、畫は正しく支那にして、畫の右傍に應永廿一年云々とありて、實に其文をなさざるのみならず、書も亦甚拙なり、恐くは俗人の支那畫へ應永云々を妄加せしならんこと曰へり、蓋し然らむ、如雪の遺作、古畫備考には、靈雲觀桃圖、紙本、白墨、畫、長、一丈、二尺、五分、思婦圖、紙本、白墨、畫、長、一丈、二尺、五分、遠山軒圖、紙本、白墨、畫、長、一丈、二尺、五分、二幅對老荷雙白鷺、柳下紅雁、紙本、白墨、畫、長、一丈、二尺、五分、山水雙幅、紙本、白墨、畫、長、一丈、二尺、五分、等を録せり、この中維摩半身像は三浦梧棲子爵所藏の物なるべく、畫上の題末に、長祿元年丁丑小春日、前南禪存味祖默七十二歲自筆拜贊とありて、文清の朱文方印を用ゐたり、山水雙幅は福岡孝弟子爵所藏の物なるべく、その印文維摩圖に同じ、この文清は恐らくは如雪と別人ならむ、左に掲ぐる圖は如雪の現存遺品中、最も的確なき佳作にして、應永中の作に係る、若し上記遠山軒圖の永享十一年、思婦圖の文安五年にして、果して製作當時の年曆ならば、如雪は應永乃至文安頃の人なりと定むべきなり。

第三百三十四 如雪筆瓢鮎圖

この圖は足利將軍義滿の如雪(一に拙に作る)に命じて畫かしめしものなること、圖上の題語に見ゆるが如し。曰はく、(口)高か(辨)口(空)者、以(口)買之、深沐水者、以(口)豈致之、乃(口)漁獵之常也、夫以(口)虛罔、罔滑之、其欲(口)採住、無辨多疑之、鮎魚於(口)泥水之中、豈可(口)復得焉乎、大相公、俾僧如拙、畫新、標於(口)座右小屏之間、而命(口)江湖群、各著一(口)語、(口)以(口)言其志、下(口)墨、その命意、元禪門の一(口)語、謹に出でたる題目にして、以て當時の名僧のこれに對する、着語、奈何を弄びしなり、義滿何等の風流ぞ、その贊者中、寂年の明なる者を、圖へ見るに、相國寺の俊承は應永二十九年六十五歲、南禪寺の性智は永享十一年、同周勝は永享五年六十四歲、同宗播は嘉吉元年、同周顯は正長元年七十歳の示寂なり、而して古畫備考にこの畫を、東山殿御好云々と大徳寺の大綱和尚語れる

よし記したれど、義政の書かしめしに非ざることは、如上の年層にても知られ、題語中の「大相公は應永十五年に薨じたる太政大臣義満公なること明なるを以て、この書の製作年層は應永十五年より降ることなきを知るべし。かくて周勝は建徳元年の生れなるを以て、その本圖題贊者の三十一人中に加はれるは、少くも二十四五歳以上なりけむと想はるゝが故に、この書は應永元年以前に成れるものならず。即ち義満の將軍職を退きて金閣に悠遊せし頃に書かしめしものなりと考定することを得べし。亦以て如雪の年代を憶かひるに足る。相國寺使承の真墨稿に在る「題台府帖監障子詩は、本圖の題贊に見えず。或は別物か。今にして如雪のかくの如く最も明確なる遺作は、本圖の外始と絶無なり。真に希有の寶蹟とす。今その全幅と書のみの部分とを掲ぐ。

宗泉、周文

如雪の門人に周文及宗泉周文あり然れども宗泉は著れず。如雪に次いで更に宋元風の墨畫を大成し、以て諸家輩出の源と爲れるを周文とす。本朝畫史に曰く、僧周文稱春育在相國寺爲都司其印文越溪周文者所謂江州山上永源寺之境越溪也。有故居此處稱之其所畫淡彩山水人物花鳥用馬夏顔之法墨畫極妙玉之與與彦龍曰胸王吳眼腕章郭畫中三昧手也師如拙有出藍之質無不臻妙然不爲倭畫近世畫舟小栗狩野之徒以文爲階梯得上宋元黨村庵小稿に兵部墨溪墨溪は周文の畫ける周文都督像の贊あり曰く、此者平日工窮天下之妙而視其容貌則儻如無所能藝衆衆人之善而內察其意氣則苟如有所讓或其把丹黃而掃掃釋梵諸天之變相於佛寺堂宇之上則以爲飛動於墻壁揮洒花鳥山水之狀於王公貴人之第宅則以爲光輝於屏障或其刻木捏泥而符未來應記者作天王寺太子像有功於吾禪門者爲片岡達磨像衆工歛手而報服者於雲居寺造無量壽如來高四丈大像是皆一時幻出於遊戲三昧中所以得賞遇於普廣大丞相也中之謂御前名藍萬年都督越溪周文其字天章者邪知るべし。周文の香に墨畫のみならず、彩繪の佛敎畫をも善くし、更に又彫像に兼ね長じて、當時に推稱せられ、將軍足利義教に賞遇せられしことを、その義教より俸祿を給はりしことは、隆涼軒日錄寛正四年三月廿八日宗滿の事の條に、俸祿如周文上座例とあるにて明なり。歳末に將軍家に扇子を獻じて綾衣一領を賜はり、年始參賀の時練衣一重を賜はるを例とせしことも、同書書畫の條に由りて知らる。又同書永享七年九月廿日の記に曰く、瑤幢寺御成齋當寺佛殿左右兩尊可彫造之故使院主與周文見建仁寺佛像蓋擇佛工故。同十二年四月十九日の記に曰く、雲狐寺本尊彫刻、奈良佛師與周文相共可彫刻之由、被仰出。同月廿三日の記に曰く、佛師與周文同道、而趣南都同月十六日十四日の條に、雲狐寺本尊彫刻の記事あり。又同年十一月六日の記に曰く、雲狐寺二王、周文可作之由被仰。東寺執行日記同十一年八月廿七日の條に曰く、雲古寺阿彌陀佛中南都者共作あしきによりて、又禪僧周文今のを作之。看聞日記永享十年四月九日の條に曰く、周文參障子繪見之此圖瑛藏主眞瑠同道參、口自筆猶無覺束歎、良心の天開圖畫樓記の中に、雲舟を指して所謂徳元文公之眞子也と曰へれば周文は天章の字の外に、又徳元の一字ありしにや、寂年闕けたりと雖も、永享の前後に亘る周文の年層は、扶桑畫工譜に、應永廿一年正月八日、如雪より畫譜君臺觀を授かる」と曰ひ、後出竹齋讀畫水色樹光の二圖は共に文安の作に係り、古畫備考に見えたる秋江落雁圖題記中の甲戌は享徳三年なるべきに由りて、略これを明にすることを得べし。京華集の題文都督墨竹小幅記文中の己亥は、文明十一年なれど、畫後の追記なるもの

第四百四十一 傳周文筆寒山拾得圖

第四百四十二 傳同筆水月觀音圖

周文の筆と稱するものに人物畫亦少からず。寒山拾得圖は律師伯賢家の傳襲に係る。彼者春屋は大徳寺僧宗圓にして、宗圓は慶長九年の示寂なれば、後の追題ならむか。水月觀音圖と共に、周文筆と云ふ傳説を肯定し若くは否定する憑據あるを知らず。されど傳稱周文運作中の名品なるが故に前出諸圖と併せてこれを掲げ、以て讀者の參考に供し、更にその研究を俟つと云ふ。

周文

周文の外に唐人周文又秀文と云ふ畫人ありと稱すれども明ならず。辨玉集畫工便覽扶桑名公畫譜皇朝名畫拾彙畫乘要略等に依るに、明人にして日本に歸化し、越前の朝倉家に寓し、後曾我氏の掣と爲り、因りてその姓を冒し、蛇足の父たり、その蹟飛驒國大野郡灘郷石浦村に在りて秀文屋敷と稱すと云ふ。日次記事に、明朝李在字周文、來本朝とあれど、明の畫傳に見えて、雪舟入明の時に就いて學べる李在は、字周文に非ず、拾彙に「永和中人」とあれど、その子なりと云へる蛇足の年代餘りに隔歴して信すべからず。されば名畫傳も頗るこれを疑ひ、古畫備考の増補にも、拾彙の「曾我直庵捺其畫上於周文六世孫之印章、是誤以秀字爲周字也」と曰へるを駁し、二直庵は正に蛇足の師事せし相國寺僧周文より畫系上六世の孫なる由を辨じ、印譜辨妄に、世の稱する唐人秀文は有無疑似の人なり、其秀文と讀むべき長方印は、蛇足の二字の轉訛せしもの、如しと曰へり。蓋し相國寺僧周文の誤傳より出でし架空の人物ならむか。

周文の門人

周文の門より出で、又はこれに私淑せし畫人甚だ多し、その著れたる者曾我蛇足、小栗宗丹、能阿彌、雪舟及狩野正信あり。この五人は各々一家を成せるが故に後にこれを別紋し、殊に雪舟、正信は各々一大流派を開けるが故に、章を換へてこれを説くこととし、こゝには爾餘の諸家を列擧すべし。

鑑貞

鑑貞は本朝畫史に、號墨溪、叙法眼、世謂奈良法眼也、畫法師周文蓋於人物也、略蹈南宋梁楷之蹤、筆法細而不詳、草而成者也、畫屏施淡彩、設水墨而不用濃色、或曰本律僧、而住南都招提寺總持坊とあり、同書別に擧げて曰く、醉墨齋桃林能畫、而有天隱和尚醉墨齋之詩序名公畫譜方更然れども醉墨齋桃林即ち鑑貞なることは、京華集に、醉墨之設、不在酒而在畫矣、爲本朝能畫者墨溪氏之事、有名安榮、字桃林、嗜畫師一休書、醉墨二字、以榜所居などあるにて明なり、續狂雲集に「墨溪畫師の詩あり、東海一休和尚年譜文明元年の條に曰く、師年六十七歲、夏讚松源祖師像、畫者墨溪、曾て周文の像を畫きしことは、先に周文の條に引ける、村菴小稿の贊記に由りて知られたり、同記の題に、「周文都管像、兵部墨溪師其畫傳其印」と曰へれば、通稱を兵部と云ひしなるべし、辨玉集には「南都住春日繪所佛像妙手」と曰ひ、畫工便覽には「和州南京人、能畫佛像、又學宋畫風」と曰へり、されば鑑貞も亦明兆、周文の如く彩畫、墨畫を併せ善くせしなり、その遺作古畫備考に山水、續物類彙編、道鏡、全く鑑貞の筆に似たり、朱

水信 古書備考書史を引いて、書畫梅出自周文流、而有古色」と曰ひ、水信の朱文方印を載せたり。

智傳 書史に曰く、信智傳號單庵、不知世姓、學收漢、玉潤、其墨戲也、能用篆、大抵似其相、其源出於周文者也、或曰、智傳相國寺之僧也、性好圖畫、好作水墨、圖、圖書又單庵筆の款記及、智傳の朱文方印を載せたり、古書備考に「不懸及、單庵の款記并に、單庵の方印、單庵智傳の長方印共に朱文及虎の縮圖を載せ、増補に、墨書梅、繪紙本、横物、帝室博物館」と記せり。

圭叱 書史に「能書墨戲、花鳥、源出於周文、書畫與單庵同」と曰ひ、圭叱筆の款記及、期形印を載せたり。

真悅 書史に「倫開齊、印文曰、真悅、不知世姓、筆法學周文、多書花鳥」と曰ひ、倫開齊の款記及、真悅の朱文方印を載せたり、真悅の書往々存す。

李忻 書史に曰く、能書墨戲、筆法出於周文、而長於大像。

如圭 書史に曰く、能書山水、書學周文。

墨隱 書史に曰く、書臨濟像、筆格出於周文。

等簡 便覽に曰く、學周文筆格、最佳、好作山水、神木、畫、方印内以名。

相泉 便覽に曰く、周文門弟、泉州人、又曰く、相泉坊住、泉、常好書、彌陀像、用金、碧、青、有所見、後於高野山、麓而卒、同人か、辨玉集には、如雪弟子とあり。

秋岳 便覽に曰く、字林、丹波人、少年苦好圖、繪、中年學周文、後有故、抽視、筆、止、繪、事。

簡翁 古書備考に仙人雙幅を録して、朱文方印を載せたり。

良敏 書史に「不知世姓、號金溪道人、能書人物、花鳥、筆法學收、撰、而其源出於周文」と曰ひ、金溪道人良敏筆の款記及、金隱の朱文方印を載せたり。

以上範圍以下十八人は、古書備考これを長享乃至享應頃の人と爲せり。

玄照 書史に曰く、不知世姓、好書布、我、而學收、撰、書中曰、玄照居士八十七歲、筆、其源出於周文。

心叟 書史に曰く、書墨、花鳥、筆法似真、相、印形亦似相之、畫形、印、又有、淡彩、山水、墨、筆、學周文、畫上有、萬里、黃、近、觀、彩色、人、九、筆、法、亦、出、於、周、文、不、用、和、機、圖、畫、に、心、叟、の、朱、文、方、印、あり。

曾我宗文

曾我家は蛇足を以てその祖とす。蛇足諱は宗養、法名夫泉、道號宗文、通稱を式部入道と云ふ。本朝書史に曰く、曾我蛇足不知其諱、越之前州人、而世爲武臣、好畫、師周文、畫山水、人物、花鳥、筆力粗而不似其師、氣韻蕭疎、非繩墨所拘也、嘗與純一休有師檀之緣、故畫大德寺眞珠菴方丈、純一休然不見、倭畫觀夫畫、寒山拾得有一條禪閣贊詞、其畫用濃墨、龍筆如草書、勢甚豪放耳、曾我宗文者、蛇足之子、而世爲武臣、學技於嚴父、最可、其所畫有彩花鳥、曾我宗養、紹仙之子、世其業、能畫花鳥、印文有玉院崇致、用ハナ之字、近觀禪祖二幅、對人物亦工、又畫阿彌陀佛、設色專學、思恭、畫上書曰、爲慈父重賢大德、畫有押字、即ち蛇足、宗文、宗養を以て三人と爲せるなり、畫工譜略は、蛇足宗養、父李周文、母は曾我氏の女たり、故冒曾我姓、曾我宗文、曾我氏、宗養子也、號夫泉、初式部、ミ曰ひ、辨玉集は、蛇足一休和尚繪之師、蛇足男宗文、ミ曰ひ、名公畫譜は、曾我式部、李周文之子、而世仕、越前朝倉氏、剃髮號蛇足、宗養、學技嚴父、好畫山水、人物、花鳥、筆略粗矣、中略、書史に同じ其裔今在飛騨國金森家、式部塚在大德寺眞珠庵、曾我宗文

初式部號夫泉不知俗名蛇足之子而世爲武臣學父之風畫彩花鳥と曰ひて、共に蛇足宗譽と宗丈とを二人と爲せれど、名畫傳に引ける眞珠庵過去帳文明十五年の條に、曾我蛇足（宗譽）法號夫泉宗丈菴主十一月十七日死、雍州府志にも、夫泉宗丈塔在大德寺眞珠庵曾我式部入道號蛇足軒とあるに由りて、一人なること明なり、日次記事（十一月十日）に曰く、明朝李在周文來本朝寓朝倉家、于時娶朝倉家女、產男子號蛇足軒、於本朝所產之男蛇足軒亦有父風與一休和尚有師檀之約故大德寺中眞珠庵并新開恩院畫幅多、其裔今仕飛騨國金森家、改曾我爲金森、然れども李周文の子と云ふは、前にも言へる如く、相國寺僧周文を師とせしよりの誤傳とせばしければ、蛇足の父は前記畫史の阿彌陀佛像の款記に由りて、法名を重賢大德と云ひし人と定め置く外なかるべし、蛇足の遺作、古畫備考に蘆葉達磨（達磨）、白文と、二方印あり、松鷹（松鷹）、六尺に、龍中、蛇足（蛇足）の、隔石巖（隔石巖）、一休像（一休像）、未太刀の、墨畫、元、年、墨、冬、日、あり、伯牙（伯牙）、立、坐、彈、琴（坐彈琴）、法、入、四、藝、中、書、畫、雙、幅、立、畫、寒、山、立、畫、款、及、印、あり、龍、中、蛇、足、の、一、休、像、未、太、刀、の、墨、畫、元、年、墨、冬、日、あり、伯、牙、立、坐、彈、琴、法、入、四、藝、中、書、畫、雙、幅、立、畫、寒、山、立、畫、名、印、牛、繪、屏、風、神、農、一、初、祖、布、袋、伯、夷、叔、齊、十、二、枚、折、花、鳥、墨、繪、屏、風、等、を、錄、し、又、そ、の、宮、殿、筆、者、の、條、に、眞、珠、庵、の、西、之、間、水、及、中、之、間、墨、畫、花、鳥、を、以、て、蛇、足、の、筆、と、爲、せ、り、而、し、て、宗、譽、の、圓、印、或、は、采、譽、と、讀、ま、る、と、本、朝、畫、史、に、采、譽、の、印、を、鑑、貞、の、下、に、載、せ、た、る、と、に、由、り、采、譽、は、即、ち、鑑、貞、に、て、墨、溪、は、蛇、足、の、一、號、な、ら、む、か、と、云、へ、れ、ど、蓋、し、非、な、り、今、現、存、蛇、足、遺、作、中、の、最、も、佳、な、る、も、の、を、左、に、掲、ぐ、共、に、畫、史、等、の、謂、は、ゆる、粗、放、の、畫、に、非、ず、流、暢、の、描、法、頗、る、周、文、と、趣、を、異、に、し、て、明、風、を、帶、び、た、る、一、家、の、風、あ、る、を、觀、る、べ、し、

第四百四十四 達磨德山臨濟像

第四百四十五 釋迦苦行圖

第四百四十六 山水圖障子畫

達磨德山臨濟の三祖像三幅は大德寺養徳院釋迦苦行圖及山水圖障子畫は共に眞珠菴の所藏に係り、傳へて蛇足の筆と稱し、最も信憑すべき遺作とす。上にも言へる流暢の描法に成れる一家の特長頗る賞すべく、釋迦苦行圖には康正二年一休の題跋あり、山水圖に至りても、周文より出で、而も周文と同じからざる風格を成せるを觀るべし。

蛇足の子に紹仙あり、畫史に曰く、曾我紹仙、宗丈之子、學祖風、有鷹栖柳之畫、筆力頗得其法、紹仙一に玄仙とするは、小島亮仙の印を誤讀せしに出でたること、名畫傳及古畫備考の増補に曰へるが如し、同書又嘗觀其所畫博奕布袋圖、有祖心和尙（一休和尚）之贊、又閱山水圖、有大永三年癸未小春幻雲老衲畫桂菴と曰ひ、その遺作架上の鷹（鷹）、手（手）、脚（脚）、の、外、は、都、う、す、を、錄、し、紹、仙、の、朱、文、方、印、を、載、せ、た、り、

曾我紹祥は畫史に宗譽の子と爲せれど、名公畫譜に紹仙の子と爲せるかた宜しからむか、畫工譜略に玄仙子也と曰へるは、亦紹仙の子の誤ならむ、丹青若木集に曰く、越之前州人、所畫觀人物草花、士氣雖乏、柔而有異風、至花草者、要寫生、所畫花鳥草蟲爲上矣、有長谷川等伯、初師紹

詳畫史に曰く、又畫花鳥蛇足偶弄筆墨而及子孫者乎。

小島亮仙

紹祥の後は墨庵、直庵以下次編に叙すべし。雖も尙本時代の曾我派に加へざるべからざる者あり、即ち小島亮僊とす。畫史に曰く、師周文、畫山水花鳥人物、而彩墨兩相似矣。但筆力差荒、不逮周文。然雅趣可愛、自書畫中、有曰天文八己、亥中夏越溪、小島亮仙筆者。越溪者、即越州乎。一曰、曾我氏之族也。余觀畫彩花鳥之屏風、又印中有白紙壹與可竹之字、名公畫譜に曰く、亮仙者、曾我氏族也。古畫備考には、其畫呂洞賓、鍾離權、圖、有蘆花道人、驢雪之題、贊焉。曰ひ、煇の繪の、白紙筆の落款及亮仙の朱文方印を載せ、畫史には、小島亮僊の落款と、亮仙の方印及白紙の圓印朱文を載せたり。白紙は亮仙の一號なりしならむ。

小栗栗

小栗の畫系も亦周文より出でたり。その祖を宗丹畫改好日繪等類に記すとす。畫史に曰く、不知俗名、性好圖畫、落筆雄偉、自成一家。師周文、樂清潤矣。蔭涼軒日錄、寬正三年二月十五日の條に曰く、松泉新造、至落成之日、來月之頃、可有御成之志、謹披露之。伴障子之畫、倩小栗之由、白之、當世除之、無餘子之由、被仰出、尤彼龍光也。同月廿五日の條に曰く、松泉軒障子、畫小栗以達于上、聞殿勸之、由披露之。畫史又曰く、中年入相國禪寺、剃髮爲僧、稱宗丹上座一作人外。蔭涼軒日錄、寬正三年三月十四日の條に、松泉軒御成、又於四面被御覽、小栗入景繪、中、小栗出家爲僧、法名宗澁也。自懇御目也。とあれば、僧と爲りしは、寬正三年三月の事なり。同書同年六月廿一日の條に曰く、宗澁自今日、於當軒、畫高倉御所御障子也。宗丹の庵號、自牧の事は、同書寬正四年二月六日の條に見ゆ。曰く、兩所御談餘、有畫師宗澁、就愚老、索庵號、仍名曰自牧。夫如何爲、紫野養叟弟子、荷擔禪、又能畫故牧牛、或取牧溪和尚之牧、名自牧、由披露之。即有御感、即語于宗澁、拜屈而爲龍光也。御扇子廿柄、高且紙十帖、獻之。その俸祿の事も亦同書に見えたり。寬正四年三月廿八日の條に曰く、畫師宗澁上座受上意、雖云何處、可作畫之由、被仰出也。俸祿如周文上座例、所受、自當院并常住、可御免許之由、被仰出也。但以春阿重、可伺之旨披露、即御領掌也。同年四月二日の條に曰く、畫師宗澁上座、如周文上座、自常住并當院被下行之月俸、可被下之由、春阿召當院主事命之、宗澁尤爲恩寵之重也。翌三日の條に曰く、宗澁上座、獻胡銅香爐、謹拜謝被下。月俸之御禮也。以てこれを徵すべし。足利將軍義政、深く宗澁の畫を愛せしことは、上記の如く、俸祿を給し、又曾て上命以外の畫を作ること禁ぜしにても知られたり。蔭涼軒日錄、寬正四年六月十五日の條に曰く、雲澤軒障子圖畫之事、可命于宗澁之事、被仰出也。上命之外、不可寫之由、以前被仰出也。仍以上命被免許、尤恩榮之至也。同年七月十日の條に曰く、御新造爲御繪本、以大智院三幅、可被渡于宗澁坊之由、能阿以折紙申之。又同書同五年十二月廿日の條に曰く、宗澁上座、每望之由、申之、可命于飯左飯左之由、被仰出也。歲末、獻御扇子、拜受、綾御小袖一領也。年始、參賀之次、拜領御練貫一重也。蓋周文隨此例也。この事本朝畫史、剃髮前なるが如く記しつれ、非なり。又蔭涼軒日錄、寬正六年十月十日の條に、來十七日、石山御參詣御宿坊、即岩坊也。御座敷障子畫、可借宗澁手之由、飯尾左衛門大夫申之。即參殿中、以伊勢七郎右衛門尉伺之。御許之由、被仰出也。即召宗澁命之。文正元年二月廿七日の條に、宗澁上座、湯沐御暇之事、伺之。御免許之由、被仰出也。同年二月晦日の條に、飯後湯山發軔、八鼓刻入。





第二百二十六 達磨大師圖

紙本著色

整八尺七寸五分 橫五尺二分

(第九十四頁參看)

京都 東福寺藏

は嘉吉頃の人と爲せり。

尊仲 古書備考に「着色枇杷小禽紙本、似納養少勝」と記し、尊仲の畫形印を載せたり。

澤富 古書備考に「畫似宗景」と曰ひ、その山水（紙本、墨繪）の繪圖を載せ、澤富の白文方印を收めたり。

源泉 同書心月源泉の下に金山寺圖（紙本、墨繪）を載して、心月の長方印及源泉の方印を收め、似宗丹楮と曰へり。

光金 同書その毛仙女圖（着色、絹本）を載し、光金の朱文方印を收め、宗丹風古楮と曰へり。

惠隆 同書にその枇杷連雀圖を載し、惠隆の白文方印を載せ、宗丹申傳、古法墨を學に似たりと記せり。

天山 同書に、天山の圓印及文字不明の方印共に朱文を載せて曰く、宗丹に似たり。毛利甲斐守殿所持。東山殿御書と申傳。白楮二幅、紙、あんどん形。一

幅は藤豆に小鳥、蝶、蜂、岩下、屋根あり。一幅は葡萄、菊、秋鳥。

宗珪 便覽に曰く、似宗景畫蹟、又兼用唐畫法、畫印以名。

中尾家、宋元
風古畫

中尾家も亦その畫系は周文より出でき、雖も、作風は別に一家を成せり、抑、如雪以後急に勃興したる東山時代の繪畫は、通稱して宋元風と謂ふ、雖も、その山水を見るに、概して南宋の院體に同じ、専ら馬遠、夏珪等を祖述せしが中に、中尾家は獨り南畫の風格を帯びたり、近古大雅、蕪村の出でしより、前南宗の山水曾て我が國に在らず、世間通途に言ひ來りし所なり、雖も、何ぞ知らむ、東山時代に於いて、早く既に宋元の古南畫に近きものありしことを、熟く中尾家の畫を観るに、その法多く斧劈の皴を用ゐず、専ら渲染、澁墨を以て山石を作り、米點を用ゐて樹木を畫けるは、即ち南宗の山水に非ずして何ぞ、これを我が國の古南畫と謂ふも、敢て不可なからむ、而して中尾家三代の中、阿彌は獨り勁硬の筆もて斧劈の皴法を用ゐ、他の同時代諸家と共に、多く北宗の畫を專にせり、雖も、能阿彌、相阿彌の二家に於いては、南風頗る著し、想ふに、當時舶載の支那畫に、宋元南宗畫も多かりけむ、此ことは、君畫觀左右帳記の人名に考ふるも、明なるのみならず、現存の遺品にも、趙大年、高克恭等の作あるにて知らる、能阿彌が周文の門より出で、獨り別格を成し、は、即ちこの種の藍本に得る所ありしには非ざるか、雪舟、元信の畫にも、披麻の皴法に近きもの、米點及渲染法を用ゐしもの、少からざるは、亦この系統に外ならざるなり、然れども、後大いに發達せずして止みぬ、本朝畫史に能阿彌を敘して、所畫專慕牧溪と曰へり、牧溪の畫、由來馬遠、夏珪と流風を異にし、謂はゆる南宋の院體には非ざるなり。

畫史

中尾眞能、通稱能阿彌、春鷗齋又鷗齋と號す、將軍義政に仕へてその同朋衆の一人たり、畫史に曰く、鑑定古今書畫題名在于今、世人以斯爲證、中尾眞能畫工歌、中尾周文爲墨戲、則筆力稍健然、平淡趣高、不多其筆蹟、其圖中、多有畫竹石、善於花鳥及山水、猿猴、君畫觀左右帳記は、即ち能阿彌の記す所卷末に記して曰く、此一巻、類依御懇望、注進之候、閑被成御覽、御不審之事候者、可承候、口傳可申候、努々不可有御他見候也、文明八年三月十二日、能阿彌、大内左京大夫殿、能阿彌、相阿彌、原本は相阿彌より千蓋し、能阿彌鑒識に精く、當時漸く風を成し、座敷飾、茶道等に通じ、風流

彌は後に言ふ如く永享三年頃の生れなれば、この時僅に五歳なるに徴し、藝阿彌とは別人なること明なり。藝阿彌の連歌を能くせしことは、古畫備考に引ける新撰都玖玻璃に見えたり。曰く、藝阿法師、ちごりなく入江の山に月さえて、そこそやごりをえこそさだめぬ。文明十二年六月、慈照院入道贈太政大臣の家にて、百韻の連歌に、かくぞこ聞て人のこへかし、藝阿法師懸しさもかぎりになりぬ我命なびく心もうつろひやせむ。法師と云はれしからは、能阿彌以來僧形なりしならむ。これ蓋し禪苑より出でし同朋衆の俗か。本朝畫史に曰く、吾親畫仙人屏風、筆法似眞能、稍有氣韻。半陶已西、本朝名畫藝阿筆の、吾樵者王質視仙人對茶、圖の賛あり。その遺作、古畫備考に録する所、後出瀑布圖の外、山水圖、あり、横川、川、の、風、雨、の、景、を、畫、し、た、り、靈照女、、蓮雁、、二牛、、牧童、、二牛橫物、、等あり。歿年詳ならず。雖も、瀑布圖は題記中に見えたる、成成より三年後の文明十二年頃の作にて、學叟眞藝五十歳と記したれば、永享三年頃の生れにて、文明年中を盛りこせし人なることを知る。左に藝阿彌の遺作二點を掲ぐ。

第四百四十九 藝阿彌筆瀑布圖

第五百十 同筆觀音圖

前者は、學叟眞藝五十歳の款識と圖上の横川の記とに由り、後者は、學叟の畫形印に由りて、藝阿彌の筆なることを徴すべし。能阿彌、相阿彌の筆墨類雅なるに似ずして、藝阿彌獨り畫風の異なるを觀る。

相阿彌

藝阿彌の子を相阿彌とす。諱は眞相、松雪齋又鑑岳と號せり。畫工諸略に曰く、生國は越前朝倉家之者、後東山慈照院義政公へ被召出、本朝畫史に曰く、與祖父相繼而侍童、朋衆爲茶人、仕公方慈照院家爲山水、人物、花鳥之墨畫、又施淡彩、清雅可愛、其傳出於周文、其用筆也、專主牧溪、陪東山左右、每有宴會賦詩歌、作圖畫、如今有書、倭歌短尺數枚、且以掌公方家茶器、鑑定古今之書畫、而題其名、至今人信之、而爲證、所撰君畫觀行于世、其中之名題、蓋在公方所藏之畫軸、、相阿彌畫後、有書眞相六十七歳者、不知其餘年、相阿彌の正月扇進上の事は、先に引ける宗吾大草紙に見え、同書又、東山殿へ御移候て、、の條に、、から物奉行から物見候事、千阿、相阿と見え、常德院殿江州御動座當時在陣衆著到、、にも同朋衆中、相阿の名記されたり。されば、能阿彌が義政公の同朋衆としての職事は、唐物奉行にて、畫史の言へる如く、船載品の鑑定及管掌に在り、又義尙にも仕へて、又その同朋衆の一人たりしなり。隆涼軒日録文明十七年十二月十八日の條に曰く、不參招相阿、鹿埜助齋之齋罷、小補來、相共評議、十僧之畫、樓有宴、同月廿四日の記に曰く、十僧畫樓、去十八日、横川、相阿、鹿野助、終日於愚所評議之、同十八年正月十三日の記に曰く、李龍眠筆之老子青牛之圖、相阿方申、可遺、瀧野方之由有命、、遺丹公、相阿宅、老子圖之事、傳台命、同十九年六月九日の記に曰く、就鹿苑三幅一對之事、召相阿、相阿近日不例加養生、一兩日之間可來云々、自鹿苑三幅到來、張思恭筆釋迦文殊普賢、同月十二日の記に曰く、

入洛國工藝阿一見其畫以賞有高超遂招到其家悉出相府所藏畫本爲之摹以故筆勢益進（入洛以下等語實爲阿之文に同じ）宋季有殷濟川者稱名畫常牧溪從之學今也似之及其歸藝阿親作觀瀑僧圖付之書記就岩惟肖求贊詞觀瀑僧圖は即ち前出の瀑布圖にしてその横川の跋に曰く相陽啓上人遊於繪事者也戊戌歲觀光上國就國手藝阿學畫三年而業成矣一日告別回里藝自畫於軸以饒其行意在證得於藝者耳可嘉矣（下等語實爲阿之文に同じ）貧樂齋詩の序（阿之文に同じ）に曰く建長啓賢江敏而多藝以畫爲業（中略）厥所留滯必貧樂扁僑居之室（中略）就大信錄小補翁求其揮洒焉（中略）矧聞將欲俾洛社諸老各賦一絕以美焉（下略）明應歲舍癸丑春三月下休三蘆野人江介周鏡紋翰林葫蘆集に見えたる題貧樂齋詩後跋に曰く賢江啓公記室海東相陽人也栖笠於福山有年矣平居修心禪悟之餘發其胸中所謂於繪事（中略）洛人之評畫者咸知關東有啓書記今年又入洛寓此山中到處貧樂齋爲扁謂諸老賦詩（下略）知るべし啓書記が文明十年京都に至りて畫を藝阿彌の指導に學び同十二年鎌倉に歸り明應二年再び入洛せしことを梅花無盡藏に啓書記の畫ける山水畫軸序あり以て啓書記の畫歴を補ふに足るのみならず又當時の禪僧畫贊流行の狀を察するに宜しきが故に左にその全文を抄出す。

（或人書一軸於余若耶之客簾相告曰嘗洛社諸老之詩什欲書畫末雖然未得其便請先以一餅置始則可矣余宿醒未解摩挲老眼展之而卷之爲之而展之如是泊乎數四焉十日之水也五日之石也山也溪也橋也船也室也深也梅也竹也綠樹也煙村也有關若有浮圓豆人有十六而寸馬無一也飛騰萬丈如吼而波湧余已坐忘不辨假畫真境之二萬聲呼小松聲晚流欲就數峯之深處結茅傍有煎茶之童子匿笑云假畫而非真境也余茫茫然付一嘆而已如心既開而編著眼則有畫者之印文曰群賢呼啓外記題湘南巨幅之妙寫入洛而受能畫師之印其畫贊與余遊武陵之時遊遊作貧樂詩與之風流之妙寫而丹青非無意也余今所見之畫而不知所不見時什之妙蓋預擬待殊者乎哉

古畫備考に啓書記の畫ける鍾馗圖の贊ありその文中に曰く吾昔見吳道士所畫鍾馗（中略）今展開此圖則吾朝啓賢江所筆也吳氏與物色惟肖吳氏啓氏異代同調左右逢原（下略）維歲大永龍集癸未（三）仲夏初吉稱意叟東永書于江村禪室知るべしその畫の頗る當時に推重せられしことを扶桑畫人傳には又休月齋龍杏榮普齋等の號あり（四）曰ひ畫工便覽も休月齋を啓書記の號と爲せれ（五）休月齋は古畫備考に法眼と註してその蘆雁圖（六）啓書記風あれ（七）も少々近く見ゆ（八）曰ひ又その巢父圖（九）豐干圖（十）三笑圖等を録し法眼の長方印（十一）及啓孫（十二）の方印（十三）を載せたり蓋し啓書記と同人には非じ龍杏の事は既に前に述べたり榮普齋は本朝畫史に不知姓名蓋畫僧也善作布袋並文殊其畫學牧溪其源出於周文或曰啓書記之號也不知其實畫意與楊月相伴（十四）曰ひ古畫備考には按其畫花鳥人物皆似祥啓筆法印章云法眼啓（十五）曰ひ至其得意之作頗類于啓書記前輩多極爲書記所畫（十六）曰ひ啓牧（十七）の方印（十八）を載せ且この印を用ゐたる畫に神農像（十九）文殊（二十）等あることを記し又按休月齋與榮普齋同人歟猶可考（二十一）曰へり蓋し亦啓書記とは別人ならむ啓書記の歿年は闕けて傳はらず（二十二）雖も上記に由りて文明乃至大永頃を盛りとせし人なることを知る鍾秀齋詩軸（二十三）

春江 便覽曰く、師做啓書記所書山水人物又兼元信風格有士氣。

夏桂 同書に曰く、不知何人學於繪祥啓山水人物及草鳥畫又可也名畫傳は、享祿頃の人なるべしと曰へり。

雪信 同書曰く、不知何人所書啓書記風氣始學雪舟元信風畫不一而兼合做雪舟祥啓元信等諸家畫體。

月浦 同書曰く、雪佛像、祖師、殊工觀音像似啓書記而風致逸之古畫備考に曰く、墨畫觀音其左右朝陽對月を畫く。啓書記の畫樣に似て、觀音殊に住し。

款識は別に印譜に出す。月浦は其印中の文なり。足利末葉の畫とみゆ(坦齋記)同書文字不詳の白文圓印及月浦の白文圓形印を載せたり。

琳叔 古畫備考に「琳叔の朱文方印を載せて、安信外題啓書記山水と記せり。

蒲保 同書蒲保の朱文方印を載せて、啓書記文殊獅子ありと記せり。

周慶 同書周慶、歸雲の朱文方印二を載せたり。

與收 同書曰く、似仲安具廣養朴縮圖有三幅對稱連五六祖墨畫又有寒拾圖縮圖を載せ、且紙本墨畫、豎幅、啓書記、與悅などの風有と記せり(同書又六

臂觀音(紙、小、立、白描)の印(與收の朱文方印)を載せたり。

楊舜 同書に楊舜の遺作三幅對稱連左右文殊、普賢を載し、楊舜の白文方印を載せ、且曰く、爲雪探畫如何と記せり。

性安 拾葉に曰く、常州太田郡深山村耕山寺住職、號梅庵、學祥啓、畫人物山水、歲八十餘、臨終、遺令其徒云、真院塔碑、唯植一松樹、今尙存矣。古畫備考

にその遺作畫三羽蓮蓬、墨畫、紙、小、立、及畫に雀の圖を載し、文字不詳の朱文方印及性安の白文方印を載せ、且曰く、畫極似雪村印體亦似雪村と曰

へり。或は雪村の派か。

德悅 古畫備考に「德悅の白文方印を載せ、且曰く、觀音、墨畫、紙本、祥啓風也と記せり。

特木 同書曰く、辨玉集に「保啓書記、畫工、諸略及名公畫譜には啓書記の弟子と爲し、諸略は、繪畫事稀也と曰ひ、名畫傳は「文明頃の人なるべし」と曰へ

り。

溪高 同書に「溪高筆、養朴縮圖、啓書記風にて惡款、墨繪觀音と記せり。

ト翁 同書に「ト翁の朱文長方印を載せて、啓書記と申傳と記せり。

正茂 畫史に曰く、能畫墨梅、筆法有啓書記之風、又見荷葉、筆力出從雪舟、而畧有潤、古畫備考又有蒼色布袋觀稚子圖(紙本、養朴縮圖)と曰ひ、正茂の白

文及朱文方印并に朱文長方印を載せ、且曰く、宗丹、啓書記に似、上手也。

喜悅 備考「紙本、枯木子母猿、祥啓時代の畫風」と曰ひ、喜悅の朱文畫形印を載せたり。

守啓 同書「畫布袋天圖(紙本、縮圖)を載せたり、極似祥啓、又觀山水」と曰ひ、守啓の朱文方印を載せたり。

祥琳 同書「畫似啓書記」と曰ひ、その遺作鍾馗(紙本)を載して、祥琳の朱文方印を載せたり。

宏員 同書「畫有可翁、祥啓風」と曰ひ、その遺作寒山(紙本)を載して、宏員の朱文長方印を載せたり。

祐榮 同書「畫山水、人物、有祥啓及祖榮之風」と曰ひ、その遺作騎驢人物を載して古拙と評し、且祐榮の朱文畫形印を載せたり。

素軒 同書にその巖松雙梅圖を録し、啓書記申傳と曰ひ、文字不詳の畫形印及、素軒の方印(共に朱文)を載せたり。

敬淡 同書にその靈照女圖(彩色、描法淡墨也)を録し、敬淡の朱文畫形印を載せ、啓書記、古法眼の流歎と曰へり。

觀芝 同書にその塞山圖(紙本、墨幅、秋月より古く見ゆ、有贊)を録し、稍有祥啓風と曰へり。出す所の印文、同書別に觀梵として奉げたる塞山拾得圖(縮圖を載せたり)の印に同じ。或は觀梵か、而して觀梵の條には、敬淡の由古畫也、和舊風有、今按、此印ある畫に清神の贊ある者あれば、慶長比ならむなど曰へり。尙後考を期す。

興朴 同書にその如意輪大士圖を録し、興朴と箱書有、啓書記に似たりと記して、文字不詳の朱文方印を載せたり。

祥音 同書に祥音の朱文方印を出せり。

喚舟 便覽に曰く、不知何人、多藏粉本、所書皆法古、若有士氣、備考其畫白畫及、萬鍾、有祥啓及、雪村風、然皆如模本、乏清活と曰ひて、喚舟の朱文方印及、白畫の輪圖を載せたり。

東朱 拾遺に曰く、嘗見其仙女圖、備考に縮圖を載せ、且、元信風にて細く、彩色も元信に似たり、紙はどうさなし、印押方も、ぬりて押たる物なりと記せり、有古畫、舊以此印、東朱の朱文方印之畫、爲、東西畫。

敬松 畫史に曰く、能書禪家祖師像、備考曰く、似祥啓、同書又文字、摩訶の朱文長方印と、敬松の朱文及、白文方印とを載せ、山水、雪村の如くにして、しつかりとしかる物也、敬松老人とありと記し、増補にも、敬松の朱文方印を載せて、鎌倉建長寺寶物、寺傳、啓書記、観音三十三身圖に押する所の印と記せり。

啓宗 備考に、啓宗の白文方印(木印なり)を載せて、此印あるもの敬松に極たる事あり、墨畫、観音(紙本、似祥啓)と記し、又、瀧見李白を録して、全秋月にて、人物は少柔、岩波、能似たりと曰ひ、同書、増補に、靈雙、輻、陪、有、祥、啓と曰へり。

大集 畫史に曰く、書三教、供、墨、色、筆、意、似、啓、書、記、以上可、敬、以下三十三人は、古畫、備考、これを長享乃至享應頃の人と爲せり。

上來、絞する所の外、別に系統を成さざる雜派の畫家及、非専門の能畫者、少からず、今、編纂を雜出して、左に略これを列擧す。

無外 本朝畫史に曰く、無外和尙、諱、爾然、爲、一、國、師、弟、子、而、爲、實、相、寺、之、開、基、性、好、圖、畫。

運良 字は恭翁、法燈、覺心の法嗣、羽州の人、加州傳燈寺に住す、曆應四年八月十二日寂す、歳七十五、佛慈禪師と諡せらる、延寶傳燈錄に曰く、嘗書大慈像(中畧)在加州大野尾寺。

梵僊 竺仙禪師、元の慶元象山縣徐氏の子、古林茂の法嗣、來々禪子又志歸叟と號す、元徳元年六月來朝し、建長寺の第二十九世、南禪寺第十七世たり。

南禪の楞伽院を創し、又三浦無盡壽寺の開山たり、貞和四年(正平三年)七月十六日寂す、歳五十七、古畫備考に、自書贊、政、資、牛、(薩州、東、維、摩、像、贊)を録し、四明梵僊等の款、觀、志、歸、子、及、梵、僊、の方印を載せたり。

因知客 貞和類聚、祖、苑、聯、芳、集に、感、應、因、知、客、水、墨、圖、詩あり、因は、潤なり。

疎石 俗姓は頼伊勢の人、初名智暎、字は夢窓、木納里と號す。天龍寺の開山なり。觀應二年九月廿九日寂す。歳七十七。正覺心宗、普濟玄猷、佛統、大圓禪師等の総統あり。本朝高僧傳に曰く、自圓、死屍九相之變、辨慧觀想、便覽に曰く、善圖繪好畫、觀音像及草花、山州名跡志に檀林寺諸堂の圖書は夢窓の筆なりと書へり。

周豪 畫史に曰く、僧周豪、亦夢窓同時、其畫也大抵似鐵舟。

正納 大辨禪師、時覺克源の法嗣なり。元弘の頃、元至順年間元に入りて諸老宿に參し、歸朝の後、萬壽寺の法席を置す。拾葉に曰く、善畫佛祖像、筆格超凡、氣韵畫動、浙翁瑛、月江印誦師、題贊其畫上、古畫備考に、對州侯康釋尊、贊浙翁如瑛、畫似初直夫、大辨正納畫、釋尊頂相、贊墨首王正印拜贊、沙門正印、松月翁の二印あり、など傳せり。

伊豫守某 帳帳集に曰く、伊豫守時自繪喜神、留於世上、山口惠忍傳之、永爲家寶、仍附某作贊、豫州分節建雄、善家世清和發慶源、造化筆端、描幻影、併將五幅付兒孫、名畫傳に曰く、按ふに、伊豫守は何人なる事をしらす。もし今川伊豫入道了俊かともおもへど、帳帳集の作者友梅、雪村は、貞和二年十二月二日入滅なれば、時代すこし快からず、疑ふらくは、新波の鹿流尾張左京大夫家兼なるべくおもはる。家兼は尊卑分服に、重名千代鶴丸、伊豫守、本時家、左京大夫、從五位下、奥州管領、延文元年六月十三日卒、四十九歳、法名圓承とありて、時代はさらなり、豫州分節建雄、善家世清和發慶源とあるにも、いとよく協へり、又かく心づきて、猶よく思へば、伊豫守、時自繪喜神とあるは、もし本名時家の家字の脱たるにはあらぬか、蓋し然らむ。

靈巖法源 「大燈國師」延元元年十二月廿二日寂、弟子、能書、亦作墨畫、善畫情、便覽。

周瓊 默菴靈淵と號す。武州の人なり、夢窓國師の法嗣にして、待持院に住せり。曾て宋に入り、牧溪を師として畫を學び、鳳鳴寺の十八應真を畫けり。と云ふ。應安六年六月十七日寂す。歳五十六。古畫備考、貞和集を引いて、疎石の贊、默庵の畫二十二祖像ありと言ひ、天童比丘如菴の贊ある、觀自在圖の印圖を載せたり。

應世 宗造、建長寺第六十二世、應安頃の人なり。胡塵集に曰く、宗造世公、東武人、能書。

昭覺 字は圓龜、幻住老と號す。善福寂菴に參究し、層庵の初め、靈前大巖屋に隣り、十六羅漢像を畫きて、石窟内に安し、晏坐すること一年、後號を安心と改め、羅漢の石像を彫刻せり。至徳九年九月十一日寂す。

瑞 空華集、白雲丹窓詩書叙に曰く、吾舅、能書、瑞者、形於繪事、命之曰、白雲丹窓之圖。

參上人 空華集に曰く、題參上人畫、重求、一雙、翡翠、數莖、蓮、楊柳、垂、絲、燕、影、孤、更、想、道人、三、味、筆、一、揮、毫、拾、兩、顛、奴。

周信 字は義堂、空華道人と號す。俗姓は平、土佐長岡の人、夢窓國師の弟子なり。南禪寺を置すに至りて、陞せて五山の上と爲す。嘉慶二年四月三日寂す。歳六十四。拾葉に曰く、其墨戲人物、梅竹、往々存在。

鉄舟 字は德濟、下野の人、墨芳と師を同うす。曾て入元し、順宗皇帝より圓道大師の號を賜はりきと云ふ。歸朝の後、天龍寺、萬壽寺に住し、又西山龍光院を創して退休す。畫史に曰く、畫長於山水、花鳥、亦善水、墨、而少設色、比墨芳稍爲實、空華集に鉄舟の畫に題せる詩あり。蘭に曰く、鉄舟老子稱風顛、湖隱同名擬拍肩、遊戲神通人不識、只今世有墨蘭傳、吾愛鉄舟老、能詩能說禪、世人都不識、空把墨蘭傳、蘭竹に曰く、老禪遊戲筆如神、善畫雙奇稱沒倫、草

聖道回懐素觀蘭花貌得屈平真、雲根雨濕湖山曉、竹色烟嵐楚水春、雙屐已歸西山去、披圖些々淚沾巾、又葡萄の養あり、知るべし、梵芳と共に當時頗る世に稱せられしことを、その自題の詩一首古書備考に見えたり。曰く、頗崖見此芳、采々憶沈湘、騷客今何在、春來有國香、詞書又「鉄舟の白文方印及「無聲詩の長方印を載せたり。南北朝の人なり。便覽に鉄牛を擧げて「玉臚子弟子、相國寺僧、書蘭とあるを、備考には「按鉄舟之誤歟と曰へり。

淨慧 諱は良欽、愚溪と號す。善福寺に居る。本朝書史に「師無惑とあるの誤なるは、その書に愚溪筆、又愚溪道人筆と署して「無惑(白文)愚溪(朱文)の二方印を押せるに徴すべきこと、古書備考に見えたり。或は曰く、支那の僧なりと。義堂和尚の空華集に「走筆贈書僧慧愚溪詩あり。曰く「慧不慧今愚不愚、筆端幻出真形、明朝別後、應相憶、萬里江山一幅圖、書史には「依此詩而撰之、則習本邦、而後歸中華者乎と書へり。便覽に曰く「承天愚溪、東福寺本覺之孫弟子也、善繪、宋牧溪風格、士氣不之、苦工巧、而或謂明人、國人物、祖師傳、古書備考に「按に、承天は江湖の寺名、然れば明人たる時の書、我邦に又傳へ來りし乎と書ひ、又余近會聞其書有墨戲、筆墨蒼老、極有逸致と書ひ、觀音及山水三幅對の繪圖を載せたり。南北朝の人なり。

周千 大體と號す。春屋妙庵(至徳二年没)の法嗣、南禪寺の僧なり。古書備考に梅の書の款印を載せたり。

玄妙 字は玄翁、越後の人、嵯山の法嗣なり。放生石の事にてその名高し。應永三年正月七日没す。歳七十一。便覽に曰く「常書佛傳。

大悟 古書備考に傳せる書贊に曰く「上宮太子知命之年、手將畫木、自圖尊容、所畫真、其真今在四天王寺、大悟都督嘗寫以贈予、安于安威善法寺、特命同門比丘明應作贊辭焉、時應永丙子(三年)季春上曆。

曇芳 字は周應、法を夢窓に嗣いで、建長寺の第五十九世たり。應永八年(鎌倉志十五年とす)九月七日没す。塔を瑞林菴と云ふ。書史に曰く「墨書學牧溪、善花鳥、竹石、筆力粗豪耳。

惟玉 懶室漫稿(南禪寺仲芳圖伊の外集)仲芳は應永廿年八月十五日没(六十歳)白雲深處詩序に曰く「東山春桂上人、以白雲深處、其所居之室、其友惟玉、玉面輪焉。

雪心 眞愚稿(相國寺俊承の遺稿)俊承は應永廿九年十一月没(六十五歳)に「雪心道人書梅の詩あり。

足利義滿 足利家第三代の將軍なり。重名春王、初名義茂、准三后、太政大臣、從一位に至る。應永十五年五月六日没す。歳五十一。法名道宥(或は道有、後道義と改め、道號を天山と稱し、鹿苑院又北山殿と呼ばる。書工便覽に曰く「小書間傳于世、印内號天山、碧山日錄寛正元年六月十日の條に曰く「天山相公並御嬖之、御堂關白遠齋修行某之父滿千代、相公自書觀世音像(中略)爲滿千代書之、不二遺稿に「題相公三畫詩三首ありて、その書は觀音、八々鳥、鳩なる由見えたり。義滿公の遺作と稱するものに、五島子爵の藏に係る雪景山水圖(紙本淡彩、堅二尺一寸六分、横一尺九分)あり。

周及 草餘集(周及の詩文集、應永卅二年刊行)に曰く「自讀臥牛、歳次丙辰、月念九、一箇臥牛、是非未究云々、周及字は愚中、愚庵と號す。岐阜の人、夢窓國師及春屋妙庵に師事せり。安藤佛通寺を創してその第一代たり。應永十六年八月廿五日没す。歳八十。

宗因 字は無因、尾州の人、退藏院の第一世たり。應永十七年六月四日没す。歳八十五。胡蘆集に曰く「無因周公字示野、照容請贊、果して自書か明ならず。斯波義重 姓は源、初名義孝(或は初め義重、後義孝、正三位、治部大輔、管領職に至る。鳥丸興徳寺と稱す。應永廿五年八月十八日没す。歳四十八。法名道孝、又大純と稱す。便覽に曰く「仕將軍義滿公、常好書圖、能山水、華鳥及禽獸、甚有士氣。

曰(下)「流水集に「祭江西和尙文」あり。古書備考には觀音繪、真山水(見事、絹本、横物)「墨畫山水」等の款印を載せ、又養朴繪圖に「慈日、并慶、大廣智三祖遺像」(三)の圖相之中、三祖頂相圖アリありし由を記せり。

内藤元康 姓は藤原、又の名承貞、初め藤原居士と號し、後松岩と改む。左衛門尉に任せらる。細川氏の臣なりと云ふ。實德元年歿す。村老小稿の藤元康、扇畫杜甫飯顆圖詩序に曰く、元康亦扇吾真、元康扇畫劉伶酒壺圖詩序に曰く、又作劉伶携壺齊鍾圖、中墨、茲圖在一扇中、分其背面而成兩幅、於其面畫杜甫於其背畫劉伶、(中墨)元康(中墨)以武爲家、亦有文雅、時々作詩、有可觀者、其歌篇載在新讀古今集、名傳不朽、名畫拾遺に曰く、善畫。

禮才 愚極と號す。山城の人。善一國師六世の法孫、大中禮省の法嗣、東福寺曹源院に居る。實德四年六月六日歿す。歳九十に達とす。書史に曰く、性能書畫工、詩賦、好畫墨、觀音、文殊、兼工雜畫、專學牧溪、又喜明兆、然彩畫少、同書に「愚極」の方印あり。古書備考には鼎形印を載せ、又渡唐天神自畫贊、紙、墨、著色、實德元年己巳小春十一日とありある由を記せり。紀伊高山寺に愚極筆文殊半身像(鑿三尺一寸、横一尺三寸)あり。

其地 字は耕甫、備考に「一休書像の題記を錄して曰く、耕甫其地、藏主、圓余、願實、贊、書以善其蹟、享德二載孟春日、一休宗純。」

紹德 備考に「一休書像の題記を錄して曰く、觀祥開基、多編紹德老漢、圓余願實、贊、贊云々、一休宗純以上二人、或はみづから畫きしに非じ。

露心 古書備考に曰く、露心、書史に「甲子年、書見有此印、方廓内圓形朱文、露心、辨財天圓贊、萬里居士、其印小於畫史、願圖記、半身文殊、墨畫、紙本、贊、掛、露少林。露心の印を辨財の印と爲し、は、露心と誤讀せしに由る。

明室 東海遺華集山水記に曰く、壬午(寛正三年)秋、番友古月明公外史、託余、兼記山水圖、而同門明室、更所筆也。備考に墨畫、雪中水仙圖を錄し、平泉明室の朱文方印を載せたり。信州巖松院開山覺澄(字は明室、文明七年五月六日歿)即ちこの人ならむ。

仲淵 備考に曰く、十六羅漢一幅、乙酉(寛正六年)重陽日、禮南釋子仲淵、墨和南畫、時代不知、和漢如何、暫出此所、(明室の次)余考有朝鮮氣款。

伊勢貞藤 姓は平、八郎又兵衛助と稱す。備中守に任せらる。法名道喜、默存居士、瑞笑軒の號あり。繪林五鳳集に曰く、伊勢備中守默存居士、平日愛竹(中墨)後寄此圖、求詩、僧屋左右疎竹、綠坡蕭散、可想也、亦居士愛竹之一端耳、名畫拾遺亦この人を錄せり。名畫傳は「寛正頃の人なるべし」と曰へり。

和久某 書史に曰く、和久登岐守不知其真仕、公方慈照院家、書爲京尹、善畫馬、其書板面、昔在於清水觀音樓上、曾爲失火亡矣、古老曰、墨毛色而有靈氣也。

細川勝元 姓は源、從四位下、右京大夫に叙任し、管領に補せられ、文明五年五月十一日卒す。歳四十四。法名崇法、又宗實(或作宗實)、道號仁榮、龍安寺と稱す。天際語錄に「達磨贊、細川龍安寺殿仁榮居士畫、大平國雄求贊とあり。

泉滋 京華集に「達磨讚、墨筆あり、その末に曰く、文明五年十月初祖忌、不肯孫景三焚香拜讚。

宗純 字は一休、狂雲と號す。後小松天皇の落胤、大徳寺第四十六世なり。道譽一世に重せらる。文明十三年十一月廿一日歿す。壽八十八。遺稿狂雲集及

續狂雲集あり。書史に曰く、善畫畫、其畫狂逸、山水、人物、花鳥、皆草々而成、粗有清趣、畫上多有自題詩者、皆極風致、古書備考に一休の畫ける三十六歌仙自繪贊(畫畫共甚磊落ニ畫タル也、康正口年月、前大徳一休、博奕布袋、關自畫贊、杜甫騎驢圖、智圓知靖夜話圖、臨濟像、自畫贊、龍虎二幅對、布袋、八祖影、

六祖像等を錄し、山水、人物二幅對、及雪竹(歌あり)の繪圖を載せ、又一休及國景の印を記せり。佛鬼軍と稱する繪卷物も一休の畫と稱せりと雖も、信

すべからず。慶長物語一休宗純播州下向之事の條に曰く、明石のうら八九の塚に贈でられけるに、よところより料紙をぐをとり出して、件のかみに八九の腕を繪がき賛せられける。

新波義康 姓は源、武術家と號す。元隆川氏なり。右兵衛督に任じ、管領に補せらる。文明十七年、歳五十一にして歿す。法號即源院心叟道戒。名書拾葉に曰く、信書山水、新羅集に「武術所書石欄圖」の賛あり。

畫沙彌 應軒日錄文明十六年八月十六日の條に曰く、畫先生畫像、妙物也。命畫沙彌而寫之。同十七年六月十八日の條に曰く、退耕禾上一筆、圓頂自畫像ノ賛、在穢口、畫畫ソラニ覺テ畫之。同十八年四月十九日の條に曰く、羅國入持天與禾上入大明、游天童、圖其境、唐人作詩者、大幅而至、命畫子寫之。

由爲 應軒日錄文明十六年五月十五日の條に曰く、由爲口、鳴老父、爲子寫畫、極其筆勢雄力、見面賦。同十七年九月六日の條に曰く、由爲居居士至、寫大士蓮舟之像、以付之、可借、可珍、同十八年十月十八日の條に曰く、由爲寫南來新羅兒之像。

集九 相國寺の禪僧なり。集九一に周九に作る。字は萬里、號は梅菴、別は梅花道人、漆桶道人と云ふ。文明の末、江戸に至りて、太田道灌の眷遇を受け、文明十八年上杉定正に招かれて鎌倉に赴き、尋いで美濃に退休す。寂年闕く。著作天下白、檀中香、梅花無盡藏、棘門集等あり。梅花無盡藏の詩序に曰く、

〔辛亥〕永享三年〔孟春〕第二日、余梅菴春軒、學常之例矣。茲峰後少見、畫詩書於衝羽小坂之上、其命不可拒、用火筋爲分直而圖焉。

飯尾任式 華人佑と稱し、後住連と稱す。古畫備考に曰く、齋藤親基日記文正二年二月條下に出たり。名畫傳は「文明頃の人なるべし」と曰へり。繪林五鳳集に曰く、飯尾任式、親伯時所書、洞明坐松下、圖自撰其真。

等貴 宗山と號す。伏見邦高親王の子、法を梅山に嗣いで、南禪寺に住す。拾葉に曰く、作丹青、能和歌、今其短冊傳于世間、畫事見于京華、集梅花無盡藏の畫賛に曰く、恭惟日出所之宗室、式都親王、厥息萬年之萬松、主盟豈非法王之中乎。學問禪誦之餘、頗弄丹青、其筆格不減陳王。一日、猶寫寫於便面〔下墨〕。

京華集に曰く、走筆畫萬松、宗山侍者所書、扇面。

法實 村菴集に曰く、題北野君南遊圖、渡唐天神、乃三井寺法實道人之描貌也。其詩有遺、法實道人非畫師、偶然戲墨、淋漓淋漓、就中顯得江南路、皆相風流梅一枝、文明頃の人なり。

宋子房 梅花無盡藏、萬秀齋詩序に曰く、武藏刺史之幕府、有爪牙之英臣、是曰大石定重〔中略〕視勝地於武野、頗設墨壁之憤、邇來集亭子、其兌卦而富士千秋之積雪、震卦而煙霞渺茫、離之又、有平野松風、涼度風動、則真自然、曲於無絃琴上〔中略〕宋子房著色新意之畫圖也。

某 同書、爲文、題文、題軸上詩序に曰く、蓬萊之文、麗文、共余遊關左者、凡三篇、先余欲數飯、俾手於碧湘之畫師、寫蓬之左股。

華溪 五鳳集に曰く、竹林七賢圖、華溪藏主所筆、分作二幅、拾葉に曰く、其真蹟傳于今、可謂奇矣。天隱和尚贊〔中略〕文明丁未孟夏云々、其畫高致、能盡狀態、この畫の右幅の繪圖備考に在り。

伊侍者 蔭涼軒日錄長享二年三月十一日の條に、西芳寺明岩來、中墨、茶話云、昔於西芳寺、有經圖、文都管壁畫也、又伊侍者所筆、經四幅在之、亂中失卻、近日彼經兩幅、自出羽國到來、依之一段有奇事、同月十八日の條に、西芳坊主在、當院、語愚云、西芳瑠璃殿有經圖、其壁間掛侍者所筆之經之畫四幅、亂中失卻、在武藏國、近來有人、其三幅於寄進于寺家、同年五月六日の條に、相公曰、西芳寺經魚之畫二幅、先日有御覽、相殘二幅、可在同所乎、早々可召上之。

由、可命西芳寺之由、慈白、此二幅在武藏國、同月七日の條に、相公曰、西芳寺鯉魚畫二幅、在武藏國、急可召上、爲本可被寫之云々、件々以冷泉殿白之など見えたり、蓋し周文頃の一名手ならし。

靈衣 字は希世、村老と號す、京都の人、東山隱松院の開山なり、長享二年(或曰延應元年)六月廿六日(應軒日錄に依る)寂す、歳八十六、教諭靈明照禪師、遺稿村老小稿あり、拾遺に曰く、作山水墨畫、古畫備考、或云、波唐天神の自畫、夢想到依て、百幅畫之、甚靈異あり、今猶存する者多しと曰ひ、又波唐天神、著色紙、立古物可愛、村老筆ト申傳、實詩及款印を錄すと記し、山水自畫(細き小立物)を錄せり、又同書出す所の關坡の畫に曰く、右像乃松村村老老人、傲松下淵明繪、所撰寫也。

足利義政 足利家の第八代、幼名三寅、初名義成、從一位、左大臣、准三后、征夷大將軍に至り、東山殿又慈照院殿と稱す、法名道順、後道慶と改め、道號を喜山と云ふ、延應二年正月七日薨す、歳五十六、本朝畫史に曰く、曾祖父義隆、附居東山、東山求堂、奇異於詩歌、筆於畫、圖今所存往々有之、其中、高麗原定家之像、自加贊、同于其上者、特拔其尤、又玩古畫、古器、嘗其時也、下有真能、其相之屬、周文、宗丹之類、畫工便覽に曰く、圖繪有器、頗收漢風、格而有動勢、其外小畫、問傳于世、古畫に「天山の印を押せるもの、傳へて義政公の靈殿と爲す(辨玉集等)と雖も、天山は義朝の號なること上に言へるが如し、又古畫備考に「陽山の朱文、蓮形印を義政の下に載せられたれど、陽山は持氏の號なり、同書増補に片野青邱これを言ひ、又從一位源朝臣義政の署名を載せたり、その遺作備考に升に、眞相阿彌風也、囑之繪(一幅、在萬野學侶方五智院等)を錄せり。

泉公 備考に曰く、景蘇泉首座、或傳者、又號景蘇堂、善墨竹、五鳳集に「景蘇堂墨竹、瑞溪風而石竹、爲景蘇侍者題等の詩あり、葫蘆集に「景蘇泉公首座五七日の詩あり、その後記して曰く、維時延應四年、歲次壬子、仲夏十又三日、相國座主景蘇泉公禪師、了無生三昧焉。

北房 隆涼軒日錄、延應二年六月廿七日條に「北房、自今晨、四宮方私宅、障子畫始之、同三年六月三日條に「北房、自今晨、松東軒客殿、障子下畫畫之、君澤機也、同五日條に「北房、畫障子、於意足軒齋、(同日以下七月廿七日までの條に「北房、畫障子」と殆ど毎日見ゆ)同年七月廿一日條に「北房、畫障、福昌、繪掛、松東軒書院、障子八景畫、今日畢、其功、夏珪、機、其本也、明應二年八月十六日の條に「喜多坊來、花鳥障子畫加筆など見えたり、この人畫傳の諸書に逸せりと雖も、蓋し亦東山時代の一名手なりしなり。

景三 南禪寺の禪僧なり、横川と號す、明應二年十一月十七日小補に寂す、歳六十五、東遊集、閑門集、京華集等の遺著あり、古畫備考に、山水の縮圖及「景三の白文方印を載せ、紙本、横、古、胎清風ありて、階分見事なり」と曰へり。

純甫首座 古畫備考に畫贊を錄して曰く、右像乃聽松村庵老人、傲松下淵明繪、所撰寫也、純甫首座重寫其像、就予請題詩、不願、奉具筆、以應其求云、時明應第三詰、制後數日、龍口岳、蘭坡、史景、畫贊書。

榮仲 古畫備考に「榮仲の朱文鼎形印を載せ、記して曰く、屏風十二枚山水、上に五山僧贊、横川等あり、榮仲とよみ、わきに畫あり。

紹等 字は沒倫、墨齋、月矯、止深、拾遺、禿樵、墨隱漁、白樵、青松江等の號あり、一休の弟子にして、山城、願恩院禪玄庵の開山なり、明應五年五月十六日寂す、便覽に曰く「所畫山水、人物、傳于庭、烈、拾遺に曰く「有自畫贊傳世、問表備考に紀州、侯殿、飛泉圖、一休贊瓜圖(縮圖あり)、墨荷(紙本小直幅、題語末曰「延應辛亥孟秋日、拾遺、思等を錄せり、或は曰ふ、蛇足に學べりと。

濟河 鎌倉志に曰く、能高照鎌倉長壽寺慶一書翰其贊末曰、喜江輝輝壽像、宵師濟河西堂請贊(中略)明應庚申(九年)五月、天地二氣交造、万物日萌、建長五

深更英辨、善于懶展、獨考に曰く、書は唐書記に似たりと云へり、この書今建長寺に在り。

長仙 翰林五鳳集に曰く、長仙貴、今年十一能書而造妙矣、今世以新圖賜其臣景勝、景勝命予作一絶、慶家以賞之云、龍雪、樹々園村暮色新、舟中新月雨三

人、少年筆下巨靈手、擊此江山付近臣、名書傳、明應頃の人なるべしと曰へり。

悅書記 島陰漁唱に「題書工悅書記扇面詩あり。

珍慶主 鹿苑日録に曰く、珍慶主所書二百扇。

桂詰 字は基真、万壽寺に住せり、書史に曰く、書墨最大、自題其上曰、生佛二界、化身自由、肩頭脚下、珍寶應求、前往萬壽、基真野精、桂詰拜書、又書八景及

扇面雜興、文龜年中人、而書跋書遊中華日、墨竹居清事に曰く、此書、少林基真布向平生所持之本也、一日携來、惠予、豈不寶惜、焉、文龜三年癸亥、端午之辰

書之、稱好道人、備考には「基真の方印及桂詰の鼎形印を載せたり。

細川政元 姓は源坊名五郎(或作九郎)又聰明、從四位下、右京大夫に叙任せらる、細川勝元の男なり、永正四年六月三日(或曰廿四日)卒す、歳四十二、法名

宗興、道號雲因(或作雲門)、大心院と稱す、鳥隱集文明九年の條に「題聰明最筆山水詩あり、又同十二年の條に曰く、此繪也、源聰明公之戲筆也(中略)聰明

四海冠諸公、戲筆通神竹一畫(下略)、名書傳に、名書拾葉の京花集、南唐集を引いて聰明九を澄元朝臣と爲せる非を辨せり、古書備考も亦上記鳥隱

集の書贊を澄元に繋けたり、その非なること名書傳に言へるが如し。

上杉顯定 姓は藤原、山内と稱す、初名四郎、從五位下、民部大輔、右馬頭に叙任し、管領に補せられ、永正七年六月廿日卒す、歳五十七、可尊(或作可淳)、結

峯、常春の號あり、海龍寺と稱す、京花集に「越守常春白鹿圖及文殊贊の詩あり(文明十四五年の作ならむ)後者に註記して曰く、上杉太守顯公、自書文

殊昔賢二大士、乞願、走筆、梅花無盡藏にも「柳園贊の詩ありて、管領顯定筆と註記せり、名書拾葉に曰く、善書人物、花鳥。

足利義澄 足利家第十一代、初名義遇、義道又義高、從三位、參議、征夷大將軍に至り、永正八年八月十四日江州岡山(或作岳山)の城中に薨す、歳三十二、法

名清見、道號旭山、法住寺殿と稱す、書工諸略に曰く、專翰を愛し給ふ、墨翰の布袋あり、筆法如直夫。

細川成之 姓は源、初名六郎、兵部大輔、讃岐守に任せられ、永正八年九月九日卒す、歳七十八、法名道空、慈雲院と號す、本朝書史に「細川久之、阿波國之庶

細川頼春五世之孫(誤傳、名書傳これを辨せり)也、玩倭歌、好圖書、永正八年九月十二日(誤傳、同上)卒、法諱道空、號大川、稱慈雲院、嘗觀于天隱詩集(天隱の

詩集には墨芙蓉の詩あるのみ、又名書傳に精し、細川阿州大守、見嘉海石兩片、副之以倭歌一葉、卒經但頭、以奉答、詩詞(この詩歌贊詩稿に出でたり)墨

之、細川讚州太守、好圖書、其所書扇面贊、天隱和尚作也、又所圖村田樂圖及木芙蓉、杜若、士峰、皆默雲天隱有贊之、則觀于天隱詩集(これ等の詩亦天隱の

詩集に見えず)とあるは、即ち成之なり、同書又「慈雲居士、不詳其姓、會書觀音像、求讀辭於岩、惟肖、載早霖集、(善書)也とあり、拾葉に「慈雲空和尚書

山水(京華集)とあるも、恐らくは同人ならむ、鹿軒日録文明十八年二月十三日の條に曰く、願首座手送道空居士所作之山水畫一幅而至、要予題其上、

道空者讚州太守也、今著僧服、號慈雲院之人也、神苑詩文集中成之の書贊多きを見れば、その書の當時に推稱せられしこと知るべし、村老小稿に「翠

高麗魚圖、讚州道空筆、(題讚州所書普化像)源讚州工書云々、鳥隱集に「扇面書、乃讚州太守源公之所書也云々、文明九年の條、京花集に「扇面、楊柳陰中宿

燈柄、如人潔白出塵泥、春流未漲千山雪、一足獨攀寒水面、文明十三年の作か、瀟湘八景(慈雲院頭、爲上野刑部公造此圖云)扇面(唐好神仙與漢齊、金藍一氣夜寒々、曠空人在天境上、月掛寒珠宮樹西、此扇面也、唐人許鍊師詩中之畫、而慈雲老君、畫中之詩也云々)、書齋香檜實兩軸(一宮長門請麻香詩有序、古名公鉅卿之遊於繪事也、如曹將軍、韓晉公者、不多見也、讀州源府君者、今之韓曹也、於扇面寫麻香、筆之與墨、俱香如真、山麻彈騎於臺山、菴水之中者、實非庸工之所企也云々、檜實詩、一宮長門東桂、乃源府君麾下之老臣也、享主隆厚、世以忠義而顯矣、得府君所書扇面、以爲家寶、彌之麻香、覆則檜實、分爲兩軸、文明甲午、題讀州府君所書扇面(竹下有鶴、讀州太守源府君、平居能書、如能文、扇面落筆、鶴雙立云々)、觀音贊(慈雲院所書、一月千波、又万波、白衣影落碧盤陀云々)扇面(雲間有月、慈雲院所書、四維園茶園(爲讀州府君、文明丁未、山水(慈雲和尚一日招予、時、和尚笑而指曰、已亥歲、以事遊南紀、時、所歷江山、或烟雲、時、在目、心手相得、發爲繪事、乃此軸也、時、汝之、只白紙耳云々、庚子三月、半陶集に「不勸像贊(若讀州太守道空所繪、翰林胡蘆集に「觀音(此像乃慈雲居士之所筆也、讀州書術術、天陰語條に「釋迦贊(讀州太守源府君、修文假武之餘、遊心於繪事、天機之妙、直造玄奧也、癸巳冬、營中多暇、圖釋迦文老師像、命余題其上)賦、雲稿に「扇面墨芙蓉(讀州翰林五鳳集に「畫竹(右讀州太守所圖也、山水(墨戲隔雲山更圖、雲間屋古近隣稀、老奴擔重難教物、風氣沾衣、戲繪歸、此乃讀州源府君留心於繪事、酒以所賜、故家喬木世臣若樹、豆州也)等の贊詩あり、又古書備考に達磨像(紙本、墨幀、其頂相、淡著色、筆力雅健、比之如雪、周文、恐不多讓、平州讀)の贊を載せて曰く、斯像、題慈雲院道空禪老未披剃時、官暇戲筆也、精神活動、眼睛射人、雖唐宋名畫、豈企及之乎云々、文明辛丑十三年仲冬、前真如天隱畫。

胡倉貞景 姓は日下、通稱孫二郎、彈正少忠、左衛門少尉に任せられ、永正九年三月廿五日歿す。歳四十、法名宗清、天澤寺と號す。宜胤卿記文龜四年十二月九日の條に曰く、「女房奉寄、此真如天隱之像、御繪四幅、讀州府君、三代集等給之、委細如左、中、あさくらをよくかき候よしきこしめし候ほどに、この是四幅一いつい、すまゝが筆下され候はんずるとおぼしめし候。さりながら、あなたには、よきまゝ候べきに、見どころなきやうに候て、いかゞ候はんずるやらん。云々、古書備考に貞景の真跡東帝神像(左右松梅、墨繪、紙、小立、享祿四年正月廿五日)を載し、貞景畫の款記と朱文圓印とを載せたり。用象 字は金岡、俗姓は月田、讀州の人、並禾子(印讀辨安、禾並子)の長方印を奉げたり、辨玉集、善天子と誤讀して、巨勢金岡とせしこと、古書備考に辨せらるが如し)と號す。安藝洞雲寺の開山なり。永正十年十一月五日行脚に出で、その終る所を知らず。古書備考、諸國順總章を引いて曰く、兼吉中、曹洞石屋派、西國三ヶ寺、鹿實山龍文寺六世金岡禪師は、細川持之の請待にて阿波へ渡海あり云々、同書又用象の畫を見しことを記して曰く、墨梅の淡墨にて手あつく書し也、七絶か、自書贊あり、主人云、五山僧なるべしと、梅は別筆と被申しかれども、同人の程も、辨測、子曰、永享の頃也、同書に用象の朱文方印あり、辨安にもその款印を載せたり。

周麟 字は景徐、宜竹と號す。南禪寺第八十三世なり。永正十五年三月二日、壽七十餘にして万年の宜竹軒に歿す。遺稿翰林胡蘆集、宜竹殘稿あり。備考に曰く、贊自筆天神像。

一色義直 姓は源、從四位下、修理大夫に至る。名書傳、永正頃の人なるべしと曰へり。翰林胡蘆集に曰く、題匠作源公所書、二盞爭金鏡圖、此幅乃匠作源公之所繪也、公知國之暇、遊意於此藝、出于天賦也、明應六七年(1327)の作か、名書拾遺この贊を島山義統に繫けたり。

足利義植 足利家第十代、初名義材、義高又義尹。從二位、權大納言、征夷大將軍に至る。島御所と稱す。大永三年(1423)或は曰く四年(1424)四月九日阿波に薨す。歳五

十八法名道源。忍林院と稱す。名公書譜に曰く、曾見書墨迹唐像、有東福寺嵩岳明中和尙贊書後書曰、午臘月十五日、嚴山筆、近觀渡唐天神畫印文有山
清之字、或曰、是阿波御屋形所筆也、山清別稱、而西國大名也、疑義植或號山清乎、名書拾載に曰く、其手書賜臣僚、見於永正九年日記、御隨身三上記永
正九年四月十五日の條に曰く、上に墨痕ありと云はれ候御繪を拜見いたさせられ候、古書備考には不審印譜を引いて、壹形印を載せたり。

妙成 古書備考に、偽瑞雲袋布袋を錄して、妙成の白文方印を載せたり。

似依 書史に曰く、好書彩花鳥、備考にも、書花鳥、彩色と記して、書史より引いて、似依の白文方印を載せたり。

種政 備考、水墨山水、紙本角形、亦有祖師圖と記し、種政ならむとして、一壹形印を載せたり。

意傳 同書、書墨蹟、龍虎雙幅、立紙と記し、意傳の朱文方印を載せたり。

如琳 同書、書寒山拾得、書墨蹟と記したり。

周益 同書、子昂の馬二匹、まぐさをくよをけ、朱の柱二本、紙本、中立、隨分見事と記し、周益の朱文方印を載せたり。

希庸 書史に曰く、希庸書墨山水、學玉璣之風、古書備考書史より引いて、希庸の白文圓印を掲げ、同書増補には、希庸の落款を載せたり。書史の應字は
庸の誤ならむ。

華隱 書史に曰く、書墨觀音、學牧溪之風、備考、著色桃花雙雀圖、小幅、又見、唐女むく犬の盤水を飲める圖、布著色にてこの印ありと記し、華隱の朱文方
印を載せたり。

石溪 書史に曰く、書墨遠崖像並雜圖、備考、瀟見李白、紙本、墨繪、養朴縮圖、又、暖布袋、紙本、淡彩と記し、石溪の朱文方印を掲げ、増補に、石溪筆の款記及文
字不明の朱文方印を載せたり。

宗滿 書史に曰く、工書、書雜畫、同書、宗滿の朱文壹形印あり。

周珍 備考に、書渡唐天神と記し、周珍の朱文方印を載せたり。

筑陽 書史に曰く、書雜圖、備考に、其書書墨圖、有松齋春龍立濟禪師、按、策甫宗勝法圖、按、三幅對山水、雪舟風と記し、筑陽筆の款及、月下の白文方印を載
せたり。

正種 備考に、有一壹印、書山水、似等春、稍柔潤也と記し、正種の壹形印を載せたり。

周陵 同書に、書粟に雀、玉簪花蝶、雙、小幅、著色、紙、重く拙なる繪と記し、周陵の朱文方印を載せたり。

超秀 書史に曰く、書虎竹石筆法草々而成者也、備考にその落款を收めたり。

自當 書史に曰く、書山水、備考に、養朴縮圖中、三幅對、中猿、左右柳燕、蓮五位畫と記し、自當筆の落款を收めたり。

浪松 書史に曰く、書墨菓瓜、學牧溪、同書、又、浪松の朱文方印あり。

塞白 同書に曰く、書牧牛、蓋本朝於畫牛如戴嵩者、不相聞、是亦似有恨乎、同書又その朱文方印を收めたり。

斯英 同書に曰く、書文殊、爲墨戲、同書、又、斯英の朱文方印を收めたり。

秋澤 便覽に曰く、筑前僧、常書佛像、學可爲風格、且善書法、惜其書畫至少矣、後柏原院御宇比。

養澤 備考に、人物、梅竹、墨、玄也、善風、東坡の如き人物と記し、養澤の朱文畫形印を載せたり。

精庵 畫史に曰く、能書墨出山神道像、同書又、精庵の朱文方印を載せたり。

武高 備考に、善枯木、倭食圖、紙本、中、立物、土柱宮景筆中傳と記し、その繪圖及、武高筆の朱文圓印を載せたり。

明浦 畫史に曰く、明浦宮、勢州人、是名曾在印文、善畫梅、善清、造學補之、風、而非唐史之流、備考増補に、明浦の畫形印、宮、畫の方印(共に朱文)を載せたり。

秀因 畫史に曰く、善畫墨、備考、其印文曰、秀、又其書布袋、紙、小、立、有前圓覺、天、前、禿、昌、圓、覺、寺、百、五、十、七、世、寶、永、七、年、四、月、沒、養、又、觀、書、架、慶、圖、紙、本

靈旭 備考に、善畫墨、備考、其印文曰、秀、又其書布袋、紙、小、立、有前圓覺、天、前、禿、昌、圓、覺、寺、百、五、十、七、世、寶、永、七、年、四、月、沒、養、又、觀、書、架、慶、圖、紙、本、(字不明)とを載せたり。

阿庵 備考に曰く、洛下阿庵、自書、筆、印、阿、庵、墨、畫、寒、山、か、拾、得、か、巖、上、より、深、谷、を、観、く、圓、五、山、風、に、て、天、文、時、代、と、相、見、え、候、由。

玄齋 同書に曰く、善畫墨、彩色、永、其、墨、軸、玄、齋、筆、其、筆、無、疑、也、と、あり。

重垂 同書、天神、東、帶、傳、紙、本、立、色、紙、形、三、枚、と、記し、重垂の朱文圓形印を載せたり。

業呂 同書、朱文、畫形印を載せ、業呂とよみ、畫、今、按、に、乘、以、に、近、し、と、記せり。

宗秀 同書、朱文、方、形、印を載せ、宗秀と假、に、よ、み、畫、(宗)の、字、か、と、記せり。

守時 同書、守、時、の、朱、文、方、形、印を載せ、守、時、か、万、里、居、士、兼、時、龍、集、戊、午、中、夏、明、應、か、大、工、の、書、に、此、印、あり、と、記せり。

九州狂客 燕、堅、稿、に、題、書、梅、二、首、あり、記、し、て、曰、く、作、右、書、者、不、顯、姓、名、只、號、九、州、狂、客、云、々、備、考、に、九、州、狂、客、伏、見、殿、書、と、あり。

日東孫郎 畫史に曰く、善畫墨、形、而、得、妙、矣。

景安 備考に、馬、雙、幅、つ、ま、や、か、也、辭、時、代、の、由、と、記、し、て、景、安、の、朱、文、方、形、印を載せたり。

可敬 同書に、槐、記、を、引、い、て、可、敬、の、山、水、近、衛、權、下、亭、の、御、進、物、と、記、せり。

清觀 同書に、白、文、方、形、印を載せ、此、字、在、印、中、と、曰、へり、以、上、妙、成、以、下、三、十、七、人、は、古、畫、備、考、こ、れ、を、長、享、乃、至、享、祿、頃、の、人、と、爲、せり。

宗清 字、は、以、天、機、書、と、號、す、京、都、の、人、な、り、永、正、の、末、歸、に、依、り、て、大、德、寺、に、住、す、後、相、模、早、雲、寺、を、創、す、正、宗、大、隆、禪、師、と、號、せ、ら、る、天、文、三、年、正、月、十、九、日、寂、す、歳、八、十、三、拾、歳、に、曰、く、餘、閑、作、墨、畫、多、有、自、贊、備、考、に、曰、く、有、穠、穠、自、書、贊、又、桃、實、自、書、贊、同、書、に、宗、清、の、白、文、方、形、印を載す、紀、伊、無、量、寺、に、布、袋、の、墨、畫、(豎、四、尺、二、寸、横、一、尺、八、寸)あり。

故清法印 後、奈、良、院、宸、記、天、文、四、年、十、二、月、廿、三、日、の、條、に、曰、く、故、清、法、印、今、圓、天、竺、之、祇、園、精、舍、之、實、同、見、之、應、書、也、可、野、筆、歟。

六角定頼 姓、は、源、佐、々、木、氏、六、角、或、は、笑、作、と、稱、す、從、四、位、下、彈、正、大、弼、或、は、彈、正、忠、彈、正、少、弼、に、作、る、に、叙、任、せ、ら、る、會、て、十、六、歳、に、し、て、一、た、び、僧、と、爲、り、相、國、寺、に、住、し、て、龜、侍、者、或、は、吉、侍、者、と、云、ひ、翌、年、還、俗、せ、り、法、名、承、龜、江、雲、寺、と、號、す、天、文、十、一、年、正、月、二、日、卒、す、歳、五、十、八、江、源、武、鑑、に、曰、く、天、文、十、一、年、

年三月三日、旗頭の面々、如例御禮あり。今夕片桐若狭守實時、屋形(定額)を吾館へ入奉り、夜に入るまで、御一門を集め、曲水の宴をなす。屋形甚悦び玉ひ、片桐を召し、汝多年書術をせしむるよし、其間あり、吾炎帝の國をえがきていたさんとの玉ひて、其遊其繪、三の事卒年月と合はざれば、或は武鑑の偽作ならむか、便覽に曰く、任江州觀音寺、常好書畫。

宗直 字は古嶽、生若と號す。教陽院佛心正統禪師、又正法大藏國師、大德寺の第七十五代なり。天文十七年六月廿四日、歳八十四にして寂す。便覽に曰く、師書畫佛祖像及九相十牛圖、并贊之故、大德正法大藏國師古岳大和尚道行記に曰く、大弘禪師一日召師云、爾可寫老僧幻容、爲彌佛贊、爾以爲他日之證、即寫以呈焉。

朝倉景紀 姓は日下、通稱彌九郎、左衛門尉に任せらる。法名伊世、翰林五鳳集に「朝倉日下氏景紀馬贊あり。名畫傳、弘治頃の人なるべし」と曰へり。今川義元 從四位下、治部大輔、駿河守に至り、永祿二年桶狭間に戦死す。歳四十二。法名秀峰、宗哲、天澤寺と號す。古畫備考駿河隨筆を引いて曰く、自畫贊、九畫一軸、在臨濟寺。

武田信繁 甲州武田家に信繁と云ふ人二人あり。一は伊豆守信守(或作信在、信有)の男伊豆守信繁(法名長光、道號日山、法泉寺と號す、一に寶泉院に作る)にして、寛正六年十一月朔日、歳七十六にて卒し、一は信玄の弟左馬助信繁にして、永祿四年九月十日川中島に戦死せり。名畫傳は此中繪事の聞あるは伊豆守信繁なりと曰へれど、便覽には信玄弟、武名冠子時、常好面圓繪、活動而有士氣、甲州寺院今存、拾遺略同じと曰ひ、名公畫譜は二人を混同して、武田滿信子、信守舍弟、左馬頭、法諱長光、號日山、稱寶泉寺、予偶見畫彩色布袋、曾有南禪寺瑞仙和尚贊畫後書曰、左馬守源信繁寫、印文有將覺之字と曰ひ、古畫備考にも、左馬、源信繁寫の款記及將覺の朱文方印并に甲斐國志より引ける文字不明の朱文長方印を載せたり。名畫傳の説如何。

足利義輝 足利家の第十三代、初名義隆、參議、從四位下、征夷大將軍に至り、永祿八年五月十九日薨す。歳三十。法名道圓、道號融山大居士、光源院殿と稱す。翰林五鳳集に曰く、光源院大樹府君所描之墨戲也、應前内相公之求、照素、桃紅、靑紫共誇妍、獨愛新粧淡墨、鮮、白毛、掃、來何昂色、一枝花亦似贊、贊、名畫拾遺に曰く、政事餘間、喜畫花卉、翎毛。

足利義榮 足利家の第十四代、從五位下、征夷大將軍に至る。永祿十一年薨す。阿波御屋方と稱せらる。名公畫譜に曰く、近觀渡唐天神畫、印文有山清之字、或曰、阿波御屋方所筆也、備考に山清の畫形印を載せたり。

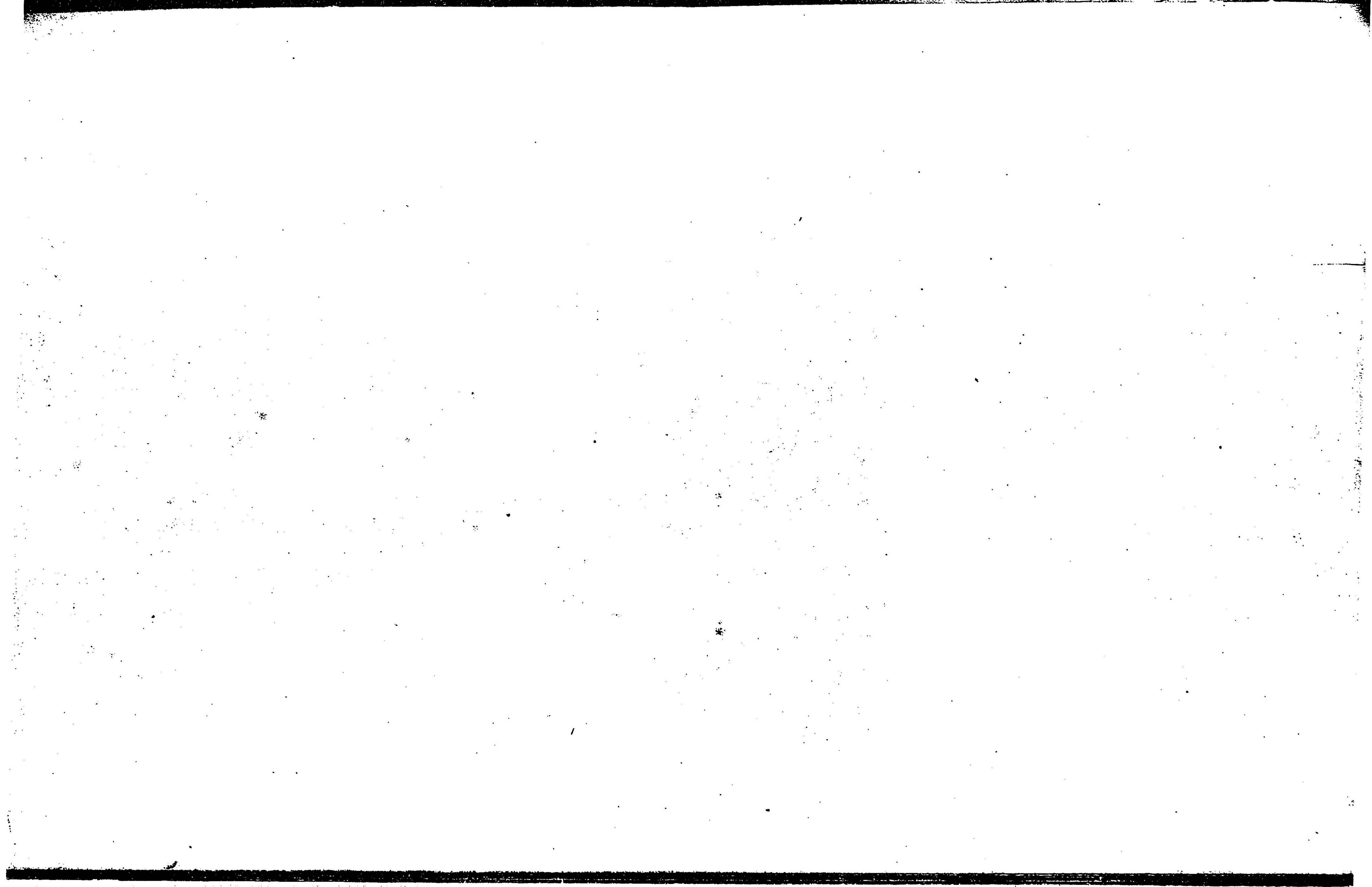
武田晴信 幼名勝千代、從四位下、大膳大夫に叙任せられ、後茲變して法名を信玄と云ひ、横山、德榮軒と號し、法性院大僧正に任せられ、元龜四年(天正元年)四月十二日卒す。歳五十三。本朝畫史に曰く、工詩畫、精神雅量、天才絕出矣、余偶所見禪祖之像、筆法如能相其風韻、甚情而不凡、印文有武田晴信之字、古畫備考に曰く、精神像、這是前甲州太守信玄公所圖之畫、君也云々、慶長二年二月廿五日、濟神桑門鉄山懶齋誌、同書、武田晴信の映形印、晴信の方印及龍圖の圓印(並に朱文)を載せたり。

雜派の畫家乃至非専門の能畫者の中、年曆の不明なる者あり、左にこれを列舉して以て本章の終りと爲す。

年曆不明の
別家

期然 古畫備考に曰く、其跡不見、時代未詳、紙本直幅、墨草下り、上に鳥。

師智 畫史に曰く、愚老師智、畫僧也、畫墨猿猴、每畫贊于其上、學汝溪之風、備考に愚老師智畫の款記及愚老師の方印、長方印、墨林愚老師の方印(並に朱文)



第三百三十 寒山圖 可翁筆

紙本墨畫

堅三尺二寸五分橫一尺一寸

(第二百三十九頁參看)

東京 男爵 純造 君藏



第三百三十一 溪陰小築圖 傳明兆筆

紙本墨畫

竪三尺三寸五分、横一尺一寸四分

全體其(一)の外に畫のみの部分其(二)をも併せ掲げて筆致を細觀するに便したり

京都金地院藏

(第三百三十九頁参照)

集漢陰地...
相前流...
萬國太平...
雲山赴清...
全惡道人周崇

水面無風...
則玉晚生...
卜佳處...
...

老樹成村...
夜三如...
...

...

...





第三百三十二 寒山圖 靈彩筆

紙本墨畫

縱三尺七寸五分橫一尺一寸六分

(第二百四十四頁參看)

橫濱 原富太郎君藏



第三百三十三 寒山拾得圖二幅 一之筆

紙本墨畫

各整三尺四寸橫一尺三寸五分

安藝國廣島 佐々木治兵衛君藏

（第二四四十五番）





第三百三十四 瓢帖圖 如雪筆

紙本墨書

竪三尺六寸八分五厘横二尺五寸一分

全體其一の外に畫のみの部分其二を大寫し併せ掲げて以て筆致を細觀するに便したり

京都退藏院藏

(第三百四十一頁墨書)

一、... 二、... 三、... 四、... 五、... 六、... 七、... 八、... 九、... 十、... 十一、... 十二、... 十三、... 十四、... 十五、... 十六、... 十七、... 十八、... 十九、... 二十、... 二十一、... 二十二、... 二十三、... 二十四、... 二十五、... 二十六、... 二十七、... 二十八、... 二十九、... 三十、... 三十一、... 三十二、... 三十三、... 三十四、... 三十五、... 三十六、... 三十七、... 三十八、... 三十九、... 四十、... 四十一、... 四十二、... 四十三、... 四十四、... 四十五、... 四十六、... 四十七、... 四十八、... 四十九、... 五十、... 五十一、... 五十二、... 五十三、... 五十四、... 五十五、... 五十六、... 五十七、... 五十八、... 五十九、... 六十、... 六十一、... 六十二、... 六十三、... 六十四、... 六十五、... 六十六、... 六十七、... 六十八、... 六十九、... 七十、... 七十一、... 七十二、... 七十三、... 七十四、... 七十五、... 七十六、... 七十七、... 七十八、... 七十九、... 八十、... 八十一、... 八十二、... 八十三、... 八十四、... 八十五、... 八十六、... 八十七、... 八十八、... 八十九、... 九十、... 九十一、... 九十二、... 九十三、... 九十四、... 九十五、... 九十六、... 九十七、... 九十八、... 九十九、... 一百、...





第三百三十五 竹齋讀書圖 周文筆

紙本墨畫

整四尺四寸五分 横一尺一寸

全畫(其一)の外に書のみの部分(其二)を大寫し併せ掲げて以て筆致を細觀するに便したり

(第二百四十三頁參看)

京都帝國博物館藏



面山皆可廬

唯多愛稱吾居

應是處佳處

日就讀書



第三百三十六 水光潋色圖 周文筆

紙本墨書

整三尺五寸七分橫一尺八分

全圖其(一)の外に畫のみの部分其(二)を大寫し併せ掲げて以て筆致を細觀するに便したり

東京 侯爵峰須賀茂昭君藏

(第二百四十三頁參考)

東光南
主之

其

野水水消保蘇

業江消微鐘扣

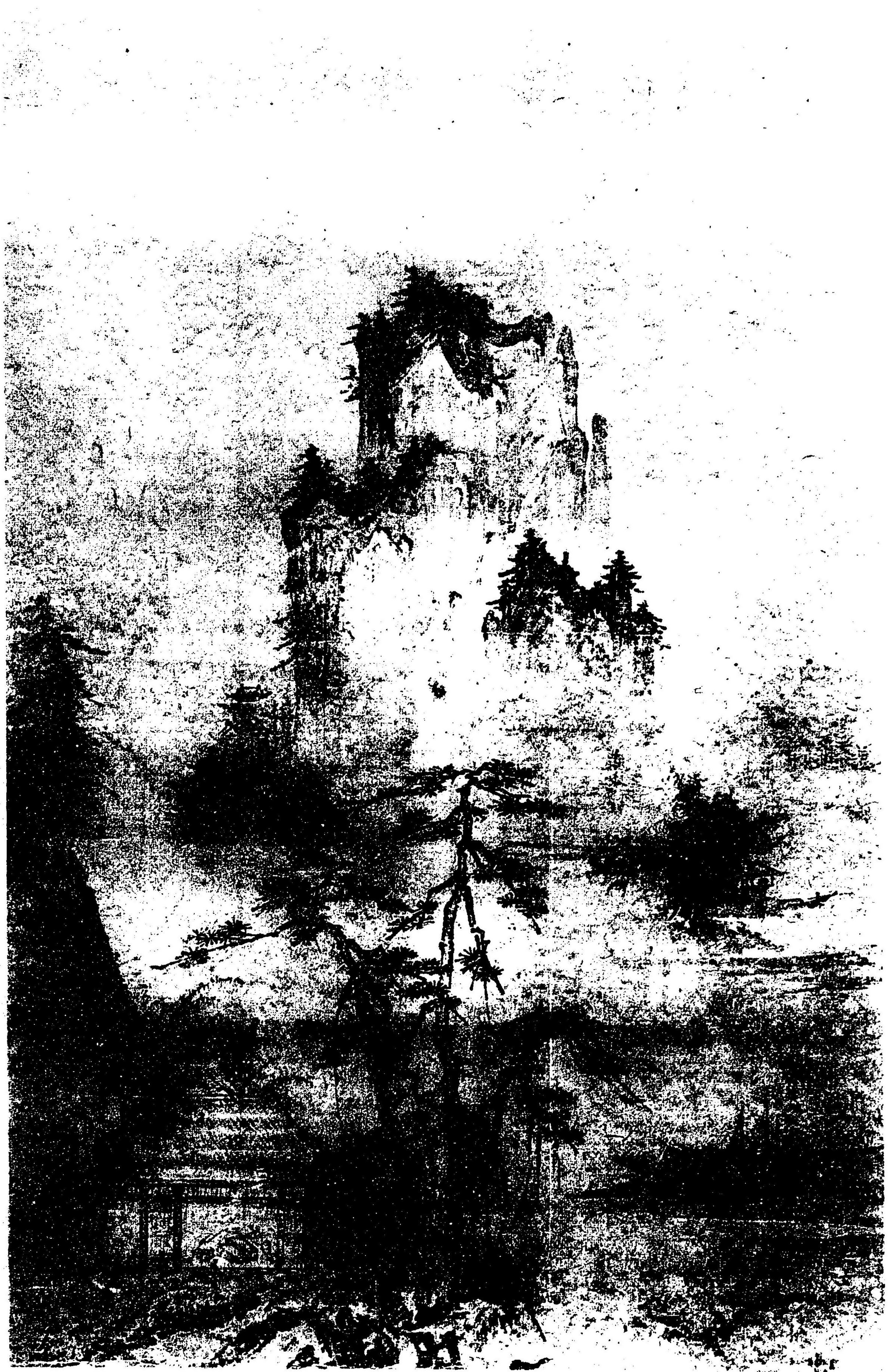
有言燈未睡人

松若

字

日

文



第三百三十七 湖山小景圖 傳周文筆

紙本淡彩、煙霞に金泥を用う

竪四尺、横一尺二寸四分

全體其(一)の外に畫のみの部分を大寫し併せ掲げて以て筆致を
細觀するに便したり

東京 鹿島岩藏君藏

(第二百四十三頁參看)



第三百三十八 山水圖 傳周文筆

紙本淡彩

縱三尺橫一尺二寸八分

大阪 住友吉左衛門君藏

(第二百四十三頁圖)



第三百三十九 山水圖障子畫 傳周文筆

第四百十 蘆雁圖障子畫 傳同筆

紙本淡彩

各畫五尺六寸一分橫四枚總一丈五尺四寸

東京 侯爵井上馨君藏

(第二頁四十三頁參看)





